
F - 1 0 5 前置き（携帯用小説）

バンダナ・ピカチュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F・105前置き（携帯用小説）

【Nコード】

N3239S

【作者名】

バンダナ・ピカチュン

【あらすじ】

必要最低知識

- ・アマガミ…1章&2章
- ・キミキス…次回作から

微妙な小説ですいません
次回書く小説では微妙な
話にはしません。
むしろ戦争状態にします

次回作…F—105

活動再開した時にPC用の読みやすいバージョンも書きます。

いろいろな小説の検索の仕方

下の方に3つの

小説検索サイトの
リンクがあります。

▼小説検索サイト

? 小説を読む

? ラブノベ

? NOS

NOSは二次元小説

(アニメ・ゲームなど)

ラブノベは恋愛小説

小説を読むは小説全般

(ただし二次元を除く)

アマガミやキミキス

後、アニメ系の小説は

小説を読むで検索しても
見つからないです。

逆に普通の小説を
NOSで検索しても
見つからないです。

ちなみに作者である私は
この事を知らないで
アマガミの小説を
小説を読むで
検索していたため
しばらくの間
小説を見つける事が
できませんでした。

休止中のお詫びとしてアマガミの全員アゴガレ状態にするルートを書きます。

絢辻さんをクリアして

無い人は絢辻さんの

イベントの時間を

飛ばせば5人を

アゴガレ状態に出来ます

※初心者の方には

変に別のイベントに

手を出さないで

時間を進める事を

オススメします。

休止中のお詫びとしてアマガミの全員アコガレ状態にするルートを書きます。

● 1日目

絢辻	3	2.	3	6
棚町	3	4.	3	0
桜井	3	1.	2	8
七咲	3	0.	3	4

● 2日目

桜井	3	2.	2	6
棚町	3	4.	3	8
森島	3	4.	3	4
任意				

● 3日目

絢辻	3	3.	3	8
森島	3	6.	3	3
桜井	3	1.	2	5
絢辻	3	1.	3	9

● 4日目

七咲 2 8 . 3 7
森島 3 7 . 3 3
中多 強制イベント
棚町 強制イベント

● 5日目

棚町 3 6 . 2 8
森島 3 8 . 3 3
中多 2 8 . 2 9
森島 3 9 . 3 4

● 6日目

中多 2 8 . 2 8
桜井 3 2 . 2 4
棚町 3 7 . 2 8
絢辻 強制イベント

● 8日目

中多 2 6 . 2 8

森島 3 8. 3 5 ☆
中多 2 6. 2 7 ☆
桜井 3 1. 2 3 ☆

● 10 日目

七咲 2 6. 4 1
七咲 2 7. 4 2 会話
七咲 2 8. 4 2 会話

会話は 2 回分で
アタックして下さい。

失敗したら今朝に戻るで
やり直せば大丈夫です。

休止中のお詫びとしてアマガミの全員アコガレ状態にするルートを書きます。

さっさと就職して

小説書き&エビコレ

をやりたいと思います。

短い注意書き

この世界は何でもありの
カオスワールドです。

何が起こっても

細かい事は気にしないで
下さい。

この世界では、

ヒロインが最初から

好きな主人公が

時間が戻るたびに

変化します。

(一部例外あり)

桜井さんや水澤さんも

例外では無いです。

カタカナの名前の人や

ポケモンが居ます。

ポケモンの名前の人は

みんなポケモンの

姿のまま学校に居ます

(ポッチャマは例外)

食堂にはカーネルや
ドナルド教祖様
ポンデ・ライオンなどが
来る事もあります。

作者の都合により、
ほとんどの人が
キャラ崩壊していますが
温かい目で見てください。

短い説明

●第1章

このカオスな世界に
生まれ育った橘純一が
過去の記憶を
克服するために
彼女を作ろうとする。

●第2章

バンダナ・ピカチュンの
作った世界、
F・105に
突然来てしまった主人公
白銀蒼鬼がピカチュンの
送ってきた使者
黒銀鈴に出会い
ピカチュンからの
挑戦状を受け取る。
白銀蒼鬼は元の
世界に戻って、
自分の世界の上崎さんに
再会するために
ピカチュンの挑戦を
受ける事にした。

時を戻しながら
他のライバルよりも
多くのヒロインの
エンディングを見る
長い長い旅が始まる。

第1章…クラス分け

●教師達

校長

クイック・コータス

教師はネタ的存在なので

いろいろなアニメや

ゲームのキャラを

臨時教師として

出す予定です。

●1年A組

担任・高橋麻耶先生

橘純一

梅原正吉

上崎裡沙

桜井梨穂子

絢辻詞

棚町薫

伊藤香苗

田中恵子

花園聖治

マサ&ケン

田口さん

山崎さん

加藤さん

黒沢紀子

その他もろもろ

●2年A組

担任

マイケル・ギャラガー

森島はるか

塚原ひびき

夕月琉璃子

飛羽愛歌

御木本久遠

その他もろもろ

●A組の特徴

アマガミキャラが

半数以上を占めている。

この組のヒロインは

浮気に厳しく、

2回浮気を目撃されると

テキタイ関係になる。

ただし、黒銀鈴は除く。テキタイ関係になったヒロインから酷い事を

される事がある。

作者が勝手に
キャラを崩壊させている
ほとんど別人に
なっている人も居る。

梅原はいい奴。 ● 1年B組
担任・川田知子先生

真田光一
柊明良
二見瑛理子
咲野明日夏
星乃結美
祇条深月
栗生恵
リョウ&トシ
その他もろもろ

● 2年B組
担任

タナマチ・モンジャラ
さつき
ひろみ
ゆみこ
その他もろもろ

●B組の特徴

全員キミキスキャラ

浮気相手が1人までなら
多目に見てもらえる。

ただし、栗生恵は除く。

多少のキャラ崩壊がある

テキタイ関係になっても
嫌がらせなどは

絶対にしない。

アマガミキャラとは
大違いである。

柊はいい奴。●1年C組
担任・古我良平先生

トロロコンブ

小林学

七河正志

星川真希

語堂つぐみ

龍光寺カイ

柳富美子

成瀬エリサ

前田一稀

響野里澄

大倉都子

七河瑠依

その他もろもろ

●2年C組

担任

アヤツジ・ダークルギア

皐月優

郡山知姫

その他もろもろ

●C組の特徴

ほとんどの人が

ときめきメモリアル4の

キャラクターである。

C組のヒロインは

主人公達がどんなに

浮気しようが

全く気にしない。

まあ、1人だけ

例外は居るが……

ヒロインに1回会った
時から傷心度という物が
発生する。仲良くも無いのに
放置されると
勝手に傷つき、
傷心度が100%に
なると変な噂が
流されて女の子から
嫌われてしまう。
これも例外ありで
信頼し合っている
ヒロインや
賢いヒロインには
全く嫌われない。
あやつ……情報操作の
できるヒロインや
周りから信頼のある
ヒロインが仲間の場合
噂を流したヒロインが
返り討ちにあって、
社会的に存在を消したり
不登校にしたり
周りからの信頼を
失わせたりする。

アマガミキャラや
キミキスキャラと
比べると
酷い扱いを受けている。

ときメモ4のキャラは
キャラが崩壊し過ぎて

原作と比べると

別人になっている。 ●1年D組

担任・道下正樹

白銀蒼鬼

山田建

松田賢

黒銀龍大

伊藤誠

七川純

川上理沙

中村亜弓

中村亜矢

黒澤恵

柊楓

綾辻つかさ

八千穂さん（ヤチホ）

西沢さん

その他もろもろ

●2年D組

担任

スマート・カビゴン

川島みくる

相原桂馬

鈴木一輝

クレパス・メズラシウム

メアリー・ライトメタル

ラウド・ソリッドアース

●D組の特徴

全員オリキャラである。

ヒロインはみんな

ヤンデレである。

ギャルゲーのヒロイン

とは違った魅力がある。かもしれない……

ギャルゲーのキャラを

元に作ったキャラなので

他のクラスの人と

キャラがかぶっている

人が多い。

このヒロインと

仲のいい時に

他の女の子に

手を出すと

スクールデイズ顔負けの

BAD ENDになる

時もある。

主人公だけが死んだり
ヒロインだけが死んだり
社会的にアウトな
感じで終わる事もある。

戦闘能力の低い

ヒロインでも

ヤンデレ状態になると

なぜか武器を使ったり

普通はできない

動きをしたりと、

戦闘能力が

極端に上がる。

1章：プロローグ（前書き）

紳士の暗い過去編です。

ちよくちよく

オリキャラの

名前が出てきますが

1章では名前しか

登場しないので

気にしないで

大丈夫です。

バンダナ・ピカチュンは
この私、作者の化身です

1章：プロローグ

●開かずの教室

（ペラリ）

橘純一

「……………」

（ペラリ）

橘純一

「……………」

（ペラリ）

橘純一

「このアングルは
まずいよ」

誰も知らないはずの
開かずの教室で
お宝本を鑑賞している
1人の紳士が居た。
彼は橘純一。
現在高校1年生である。

橘純一

「うーん、
梅原から借りた
水着物もいいけど
やっぱり黒銀から借りた
コスプレ物も
悪くないな……
マニアックな物から
定番の物まで
豊富な種類の物を
楽しめる……これは
いいお宝本だ。」

橘純一はいろいろな
コスプレを楽しんだ。

ミニスカポリスや
ナース服にメイド服、
ネコ耳にミニスカサント

橘純一

「……………」

紳士はミニスカサントの
ページを開いた瞬間
固まってしまった。

背景にはとても大きな
クリスマスツリーが
写っていた。

橘純一

「クリスマス………か」

この物語の主人公
橘純一はクリスマスに
苦手意識を持っている。

橘純一

『そう言えば
梅原がアコガレの
先輩と一緒に
クリスマスを
楽しむんだって
言ってたな……
まだ5月なのに
気が早いよ……』

橘純一は自分が
恋愛する事は
全く考えなかった。

いや、できないと
思っていたのだ。

中学3年の時の記憶が
彼を恋愛に臆病に
させているのだ。

少し時を戻してみよう。

そう、彼が

深い傷を負った

クリスマスに……●丘の上公園

多分気のせいだとは思
うんだけど、

その日の夕焼け空は
特別まぶしい
気がした……。

こんな日でも子供達は
元気に走り回る。
いや、こんな日だから
なのかもしれない。

自分も浮かれてるからか
公園内を元気に走り回る
子供達を見ると、
何故か笑みがこぼれた。

寒くないのかなあ、
なんて思いながら
ポケットに忍ばせた
携帯カイロを
握り締める。

ふと、街に目をやると、
きらびやかな
イルミネーションが
目に入った。

まだはつきりとは
見えない
イルミネーションを
眺めていると、
不思議な気持ち
がこみ上げてくる。

今日はクリスマス。

どのくらいの間だろう
しばらく

イルミネーションを
眺めていたら、

すっかり子供達の声は
聞こえなくなっていた。

携帯カイロも

すっかり冷たくなり、
冬の厳しい寒さが

公園を包む。

イルミネーションは
その輝きを増して、
今じゃここからでも
はっきり見える……。……寒いなあ

って何言ってるんだ僕は
冬なんだから
寒くて当然だよ……。……
ははっ

でも、今夜は
特別寒いよな……。……
気のせいじゃなくて

………

もう、来ないよな……。
多分……いや、
もう駄目か……

……入学式で見かけて、
ずっとあごがれてた

……蒔原美佳

ずっと話も
出来なかったけど、
3年生になって
クラスが一緒にな
ってから
頑張った……

頑張ったよな!?

梅原と色々相談して、
ようやく今日の約束を
取り付け……

女性経験が豊かな

黒銀には女の子が
喜びそうなプレゼントを
聞いて……

コンブや蒼鬼と一緒に
デートスポットを
調べたり……
他にも色々……

頑張ってきたよな……
今日のために……。
今日、きちんと気持ちを
伝えるために……

それなのに……何で
来てくれないんだろう

ははっ、美也に
自慢話まで
しちゃったよ……。
僕って本当に
間抜けだ……

………

もしかして……

僕の妄想だったのかな？

本当は約束なんか
してなくて、

全部僕の勘違いで……

いや、

そんな訳ないよ……。

笑顔で了解

してくれて……。

忘れないでよ……って
指きりまでしたんだ。

勘違いな訳がない……………

結局、ふられたって
事だよな……

……何でなんだろう、
何が悪かったんだろう

何で約束はしたのに
来なかったんだろう……
誕生日プレゼントを
贈った時はあんなに
喜んでいて
くれたのに……

どうして……

会って確かめたい……
確かめないと、
梅原に今日の事
聞かれても
答えられない……

でも……

彼女に会って……

まともに

話ができるのか？

来なかった理由を聞いて

……耐えられるのか？

とても自信がない……、

もう、

こんなに辛い思いは

したくない……

それならいっそ……

3学期だけだ……

3学期だけ耐えれば……

クラスメイトと
話さないように
過ごせば……、
そしたら
すぐに卒業だ……

それで
いいんじゃないのか……

……あつ

橘純一

「……………」

「……雪、
降ってきたなあ」

「帰ろう……」。

風邪引いちゃうしな」

……あ、

このプレゼント

どうしよう

お小遣いを貯めて買った
ペアのペンダント……

駄目だ、

とても持って帰れない。

もう、見たくもない……

ゴミ箱に

捨てていこう……

寒いな……本当に……

さっさと帰ろう……

帰って、

温まらないと……

ゆっくり温まろう……

バンダナ・ピカチュン

「これが紳士の
体験した悲劇です。

それでは、

時間を戻します。」 橘純一

「クリスマスか……」

今だに親友の

梅原と黒銀、

コンブは僕の事を

心配してくれている。

蒼鬼は遠い国に

転校したから

僕の事を心配しているか

分からないけど、

きっと心配してるん

だろうな……

橘純一

「……今年は
今年のクリスマスは
頑張ろうかな……」

過去の思い出に
縛られないで頑張る。
橘純一にとっては
大きな決断だった。

橘純一

「そうだ、今日は
丘の上公園に行こう。
そこが僕の
スタート地点だ。」

橘純一は過去と
決別する決意をした。

ここからが物語の
始まりである。

1章：プロローグ（後書き）

次回は蒔原美佳との
再会編です。

第1話：蒔原美佳

●丘の上公園

橘純一

「……………」

決意はしたものの、
やっぱり
思い出すと
胸が痛むな……

普段ここに来ても、
あまり考えないように
してたから
平気だったけど……

こうして、
あの時の事を
思い返すと……
やっぱり胸が痛む……

中学校最後の冬……。
僕はここでずっと

待っていた。

蒔原さんを……

仲間達に励まされて、
勇気を振り絞って誘った
クリスマスデート
だったのに……

彼女はこなかった……

プレゼントまで
用意してたのに……
本当に参っちゃうよな。
ははは……

もう、何が起きたのか
分からなくて……。
ただただ
自分が恥ずかしくて……
誘った事を
すぐ後悔して……

いっそもも無かった事に
しようとして、
考える事すら
やめたんだよな……

でも、今は違う……。
この場所で、

あの時の事を
思い出せる……

きっと仲間達のおかげだ

僕1人だったら、
きっと今でも……

蒔原美佳

「あれ？橘君？」

橘純一

「え？」

蒔原美佳

「ひっさしぶり〜！」

橘純一

「……………」

蒔原美佳

「やだ！

忘れちゃったの？

蒔原美佳だよ、

中学で同じクラスの！」

橘純一

「お、覚えているよ

蒔原さん……」

わ、忘れる訳ないよ……

蒔原美佳

「どうかしたの？

テンション低いね」

橘純一

「……………」

蒔原美佳

「じい」と

夕日を見てた

みたいけど、

何か悩みごと？」

橘純一

「まあ、ね……」まさか蒔原さんが
来るなんて……

蒔原美佳

「そっか」。

まあ、色々あるよね」

橘純一

「……………」

蒔原美佳

「でも本当にビックリ！
まさか橘君が

居るなんて」

橘純一

「……………」

よりによつて

ここで会うだなんて……

蒔原さんは何しに

来たんだろう……

蒔原美佳

「あゝ！

もしかして橘君も

ドラマを見て来たの？

そんな感じ？」

橘純一

「ド、ドラマって
何の事？」

い、一体何の話を
してるんだ？

蒔原美佳

「えっ？

知らないの！？

ついこの間まで

放送していた

『激愛はじめました』！

ザッキー主演！

ここでロケしたのよ？」

橘純一

「そ、それで

ここに……？」

蒔原美佳

「まあ、それだけ

じゃないけどさ……。

それにしても

『激はじ』知らない人が
居るとはねー。

橘君は

テレビとか見ないの？」

橘純一

「ま、まあ

ほどほどにしか

見ないから……」

蒔原美佳

「へへ、

信じられないなあ……」

ワイドショーで

見た気もするけど……

僕の周りじゃ

そこまで話題になっ

てないんだけど……。

ま、まあいいか……

それにしても、

……なんだろう。

蒔原さん、

ちょっと印象が
変わった気がする。

それに……あの時の事、
もうなんとも思っ
ていないんだろうか？
普通に話しかけてくる
なんて……

蒔原美佳

「ちょっとちよつと！
いきなり黙って
じーっと見ないでよ。」

橘純一

「ご、ごめん。
懐かしくて、つい」

蒔原美佳

「橘君って昔から
そういうトコ
あったよね？
ふふっ、

変わってないなあ……」

橘純一

「そ、そうかな？」 蒔原美佳

「私はどう？」

色っぽく

なったでしょ？」

橘純一

「そう……だね」

蒔原美佳

「ふふっ、ありがとう！」

蒔原さんって

こんな子だったかな……

僕の好きになった

蒔原さんはもっと……

蒔原美佳

「知ってる？」

3年の時担任だった
ユキちゃん、
結婚したんだって」

橘純一

「うん、

手紙が来てたよ」

蒔原美佳

「絶対無理だと

思ってたのになー……

あ、妹さんは元気？」

橘純一

「残念ながらね、
毎日騒がしいよ」

蒔原美佳

「あはは、そうなの？
困ったもんね」

蒔原美佳

「そういえば、
なんていったっけ、
あの子。
同じクラスの……」

橘純一

「同じクラス……えっと
梅原の事？」

蒔原美佳

「じゃなくて……
うーん、
なんだっけ……。」

橘純一

「光一か蒼鬼の事か？」

蒔原美佳

「ま、いいや。

それよりさ……

聞きたいこと

あるんだけど、いい？」

橘純一

「えっ……」

聞きたいこと？

何だろう……

あの日のことなら、

聞きたい事があるのは

僕の方だけど……

橘純一

「い、いいけど

何かな？」

蒔原美佳

「なんであの日、
来なかったの？」

はい？

橘純一

「えっ……」

蒔原美佳

「『えっ』

じゃなくてさ。

あの日、私

結構長い事

待ってたんだけど」

蒔原さんが待ってた？

橘純一

「な、何を
言ってるの……？」 蒔原美佳

「えゝ？」

それってちよつと
ヒドくない？」

橘純一

「ちよ、

ちよつと待ってよ！」

待ってたのは
僕の方なんだ。

確かに僕は
ここで蒔原を待って
いたんだ！

橘純一

「来なかったのは

蒔原さんじゃないか、
僕……僕はここで日が
落ちるまで
待ってたんだぞ！」

蒔原美佳

「えっ！？
ここで？」

橘純一

「ここで……
ずっと……」

蒔原美佳

「……それって本気で
言ってるの？」

橘純一

「ほ、本気って
どういう事？」

蒔原美佳

「橘君。

当日になって

待ち合わせ場所、

変えたでしょ？」

橘純一

「そ、そんな事する

わけないよ！」

蒔原さんは

何を言っているんだ？

橘純一

「デートコースだって、

僕なりにちゃんと

考えてたんだ。

映画館に行くまでの道で

それを説明する

つもりで……

だから待ち合わせ場所を
変更なんて……」

蒔原美佳

「……そっか、
そうだったんだ。
なるほどね」

橘純一

「え？」

蒔原美佳

「私ね、

あの日の朝

橘君から

伝言があるって

言われたの……

なんて言ったかな……

『時間を節約したいから

映画館の前で

待ち合わせにしよう』

だったかな？」

橘純一

「そんな事が
あったなんて……」

待ち合わせ場所が
違うんじゃない、
いつまで待っても
会える訳がない

で、でも一体
誰がそんなことを？
何のために？

……蒔原さんは
知ってるんだろうか。
あの日、

蒔原さんと
僕をあんな目に
あわせた人が
誰なのか……

少なくとも、
蒔原さんは
嘘の伝言を
伝えられてるんだよな。
誰だったのか
聞いてみようか。

橘純一

「誰に言われたの？」 蒔原美佳

「上崎さん……」

橘純一

「え……」

蒔原美佳

「上崎裡沙。」

橘純一

「上崎さんが……」

一体どうして……

花園聖治

「ごめんよ美佳、遅くなって。」

蒔原美佳

「あ、ダーリン！」

橘純一

「ダーリン！？」

蒔原美佳

「あ、実は

ロケの場所を

見に来ただけじゃなくて

花園君との待ち合わせ

で来てたの。」

橘純一

「そうなんだ……」

花園聖治

「それじゃあ
美佳、行こう。」

蒔原美佳

「うん、橘君。
さよなら。」

橘純一

「う、うん……」

こうして、
ハナヂ王子と蒔原さんは
どこかに行って
しまった。

しかし、ハナヂ王子の
登場よりも
重大な事を
考えていた。

なんで上崎さんが
そんな事を……

なんで……

なんで……

第1話：蒔原美佳（後書き）

次回以降から
ちよくちよく
オリキャラが
出て来ますが、
ちよい役程度なので
気にしないで下さい。

第2話：日常（前書き）

前回は蒔原さんが

上崎さんの事を

しゃべっちゃいました。

これにより、上崎さんと

主人公の関係は……

今回は変態紳士の

日常を書いた物です。

第2話：日常

●教室

今は3時間目が終わって
休み時間だ。

梅原と一緒に
今日は何を食べるかを
話し合っていた。

梅原正吉

「橘、お前は今日
何を食べる
予定なんだ？」

橘純一

「僕はラーメンかな。」

梅原正吉

「本当に
それでいいのか？」

橘純一

「……………は？」

梅原正吉

「そろそろ

この変わらない日常に
何か変化を
与えてみたいと
思わないのか？」

橘純一

「逆に聞くけど、
変わらない日常に
変化をもたらす
食べ物って
一体何なんだ？」

梅原正吉

「それはずばり、

中華スタミナ満腹定食だ！」

橘純一

「中華スタミナ満腹定食！？」

そんなの食べて午後の体育大丈夫か？」

梅原正吉

「分かってねえな。午後の体育のために食べるんだよ！」

棚町薫

「じゃあ、あたしもそれにしようかな。」

梅原正吉

「おお、棚町！棚町も中華スタミナ満腹定食に挑戦するのか！」

棚町薫

「ええ、梅原君だけに
こんな危険な事させる
訳にはいかないわ……」

梅原正吉

「棚町さん……」

棚町薫

「梅原君……」

橘純一

「……………」

また始まったよ……

薫は変にノリが
いいからな……

またろくでもない事が

起きそうな
予感がするぞ……

棚町薫

「もちろん橘君も
一緒に食べてくれる
わよね？」

橘純一

「嫌だ。」

梅原正吉

「橘……俺は
誤解していたようだ。
お前がそんな……」???.?

「梅原君、棚町さん
楽しい所を邪魔して
悪いんだけど
ちょっといいかな？」

橘純一 & 棚町薫

「え……」

僕達は声の主を見た。
成績優秀で運動神経抜群
先生からの信頼も厚い
学級委員、絢辻さんだ。

絢辻詞

「梅原君も棚町さん
英語の宿題まだ
提出して無いよね？」

棚町薫

「あ……」

梅原正吉

「そんなのあったか？」

橘純一

「うん、あったよ。

確か今日提出しないと
居残りだって

言ってたような……」

棚町薫

「あ、あたしは無理。

今日はバイト

なんだよね……」

梅原正吉

「俺も今日は無理だ。

今日はゲーセンで

新作の格闘ゲームが

俺を待っているんだ！」

絢辻詞

「放課後までに

私に渡してくれれば

大丈夫。

私が先生に提出して
おくから。」

梅原正吉

「ちなみに
その宿題の範囲は……」

絢辻詞

「教科書10ページから
15ページまで。」

梅原正吉

「そ、それなら
昼休みにやれば
まだ間に合う！」

棚町薫

「……………」

絢辻詞

「棚町さん、
今日は逃がさないからね

棚町薫

「ううっ……」

橘純一

「『今日は逃がさない』
って事は……」

絢辻詞

「前に棚町さんが
居残りだった
はずなのに
放課後になったら
棚町さんが教室に
残ってなかったの。」

橘純一

「やっぱりな……」

棚町薫

「そんな事
あったわけ？」

橘純一

「お前な……」梅原正吉

「そう言えば橘は
宿題提出したのか？」

橘純一

「勿論だよ。

僕は模範生だからね。」

棚町薫

「ふっ……」

絢辻詞

「ふふっ……」

梅原正吉

「さっすが大将！」

橘純一

「って事は

中華スタミナ満腹定食を
諦めるしかないな。」

梅原正吉

「な、何だと！」

棚町薫

「そんな……梅原君の
人生改善計画が……」

橘純一

「そんな大掛かりな事
じゃ無かっただろ……」

絢辻詞

「もしかして
全く手をつけて
ないの？」

梅原正吉

「ははは、
それを聞いちゃあ
おしまいよ！」

棚町薫

「そうよねー。」

橘純一

「……………」

絢辻詞

「昼休みは
お昼抜きで
やるよね……」

梅原正吉

「絢辻さん、
俺に英語を

教えて下さい！」

絢辻詞

「あ、ごめん。

私は先生に
頼まれ事してるから
ちよつと……」

梅原正吉

「そっか……」

棚町薫

「まあ、私は恵子に
答えだけ教えて
もらう予定だから。」

田中恵子

「薫……自分で
やろうよ……」

棚町薫

「大丈夫だって。
ちゃんと自分で
書くから。」

絢辻詞

「それじゃあ
放課後までに
終わったら
私に渡してね。」

梅原正吉&棚町薫

「了解。」

こうして、薫は
田中さんに
手伝ってもらって
宿題を終わらせる事
になった。

そして梅原は……梅原正吉

「大将、俺は誰に
英語を教われれば

いいんだ!？」

橘純一

「そうだな……

黒銀に教われればどうだ？

あいつ頭はいいから

すぐに終わらせて

くれると思うぞ。」

梅原正吉

「そうだな。」

橘純一

「あと、ついでに

このブツを黒銀に

渡してくれないか？」

僕は黒銀から

借りていた

お宝本が入った

封筒を梅原に渡した。

梅原正吉

「ああ、分かったぜ。
あと運び屋をさせるなら
それに見合った
報酬がないとな……」

橘純一

「分かった。
買ってきて欲しい
パンを言ってくれ。」

こうして、
梅原のパンを
買ってくる事になった。

うちの学校は
速く買わないと
売り切れに
なるからな……

気合いを入れて行くか！

第3話：困惑（前書き）

主人公である橘純一と
メインヒロインである
上崎裡沙の出会いです。

第3話：困惑

●昼休み

(タッタッタッタ！)

橘純一

「うおおおお！！！」

僕は全力で
廊下を走っていた。

速くしないと
梅原に頼まれたパンが
売り切れてしまう……

僕は曲がり角も
減速なしで
曲がった。

???:?

「きゃあ！」

橘純一

「あ、危な…！」

(ドオオオオオオン！)

橘純一

「痛たたたた…」

???:?

「……………」

橘純一

「だ、大丈夫！？」

?????

「は、はい！
大丈夫です！」

橘純一

「あ……」

僕はぶつかった
相手を見て
固まってしまった……

上崎裡沙

「橘君は大丈夫？」

橘純一

「……………うん」

ま、マズい……

上崎さんの顔をまともに
見られない……

橘純一

「……………ごめん。」

上崎裡沙

「え……」

橘純一

「急いでパンを
買いにいかないと……」

上崎裡沙

「あ……」

(タッタッタッタッ！)

僕は全力で逃げた。

上崎さん……なんで、

なんで……

気づいたら僕は来た道を
引き返していた。

上崎さんに

『急いでパンを

買いにいかないと……』

って言ったのに

購買と逆の方向に

走るなんて……

上崎さんは

どう思ったんだろう？

ははっ……なんか
余計に顔を合わせる事が
出来なくなったよ……●購買部

走る気力もない僕は
ダラダラと歩いて
食堂に來た。

もちろん、
パンはみんな
売り切れだった。

橘純一

「はぁ……」

黒銀龍大

「暗いな、橘。」

橘純一

「え？」

梅原正吉

「よう。」

そこには梅原と
黒銀が居た。

橘純一

「あれ……
何で梅原と黒銀が
ここに居るの？」

黒銀龍大

「宿題は終わった。」

梅原正吉

「へへっ！

黒銀の手にかかれば
この程度の宿題
1分で充分だ。」

黒銀龍大

「そう言う訳で
俺達はここで
のんびりとしながら
お前を待ってたんだ。」

橘純一

「そうなんだ……」

梅原正吉

「大将、どうした？
顔色悪いぞ……」

橘純一

「何でもないよ……」

黒銀龍大

「まあ、とりあえず
俺はあそこに居る
赤いアフロの変態から
ハンバーガーを
買ってきてやるから
お前は座ってろ。」

橘純一

「うん……」

黒銀は赤いアフロの人の
所に行った。

梅原正吉

「大将、悩みがあるなら
言ってくれよ。
俺達でよければ
相談に乗るぜ。」

橘純一

「……………」

いや、僕は決めたんだ。
あの時のクリスマスの
事は忘れて
先に進むんだって
決めたんだ！

橘純一

「梅原……僕
……………頑張るよ。」

梅原正吉

「頑張るって何を？」

橘純一

「クリスマス、
……女の子と一緒に
過ごせるように……」 梅原正吉

「が、頑張るって

大将……」

橘純一

「駄目かな？」

梅原正吉

「……………いや、
駄目じゃないさ。」

黒銀龍大

「だったら俺が
いい女紹介するか？」

橘純一

「いや、自分の力で
いいクリスマスを
過ごしてみせるよ。」

梅原正吉

「俺も負けて

いられないな。」

黒銀龍大

「2人とも頑張れよ。
応援してるからな。」

橘純一

「うん。」

梅原正吉

「よし、それじゃあ
誓いの乾杯でも
しようぜ。」

橘純一

「誓いの乾杯？」

梅原正吉

「ああ。」

俺は憧れの先輩と

一緒にクリスマスを
過ごす事。

橘はいいクリスマスを
女の子と一緒に過ごす事
黒銀は俺達を応援する事
それを誓って
乾杯するんだ。」

黒銀龍大

「なんか俺だけ
しょぼい誓いだな……」

梅原正吉

「よし、乾杯！」

橘純一&黒銀龍大

「乾杯！」

僕はマツクの紙コップ。
梅原は普通の紙コップ。
黒銀はアクエリアスの
入ったペットボトルで

乾杯した。

今年のクリスマスは
最高のクリスマスに
するんだ。

第3話：困惑（後書き）

あまり嬉しい出会いでは
無かったですね……

次回からは

橘純一が女の子と
仲良くなります。

第4話：綾辻つかさ（前書き）

怪しいヒロインの
登場です。

第4話：綾辻つかさ

●教室

はあ……昨日は
そう誓ったものの……

全く行動できてない……

今から森島先輩に
告白してくるか？

いや、それは流石に……

梅原正吉

「大将、今日は
図書委員の集まりじゃ
ないのか？」

橘純一

「ああ、うん。

そうだったね……」

委員会を決める時に
ジャンケンで負けたから
人気の無い図書委員に
決まったんだよな……

梅原正吉

「おいおい、
テンション低いな……」

橘純一

「だって図書委員なんか
やっていい事
1つも無いだろ……」

梅原正吉

「いや、そんな事はない
むしろいい事だらけだ」

橘純一

「いい事だらけ？」

梅原正吉

「そうだ！

図書委員の女の子と
仲良くなれるかも
しれないだろ！
例えば星乃さんとか！」

橘純一

「あの星乃さんと
仲良くなれる
だって！？」

そんな事は全然
考えていなかった。

星乃さんは
とても大人しい人だけど
彼女の隠れファンが
多い事は
情報網の無い僕でも
分かるほどだから……

梅原正吉

「あんなに可愛い子と
仲良くできたら
最高のクリスマスに
なると思うぞ。」

橘純一

「……………ああ。」

面倒だと思っていた
図書委員……

最高じゃないか！

橘純一

「梅原……僕は
図書委員の事を
誤解していたようだ……
図書委員ライフ
最高じゃないか！」

梅原正吉

「ああ、その通りだ！」

こうして、教室で
こんな事を大声で
話していた。

周りのみんなが
引いていた事には
全く気がつかなかった。
●図書室

僕の考えが甘かった事を

痛感した……

女子が多いと

思っていた

図書委員だったが

星乃さん目当てで

図書委員に入ってきた

男子達も居たため、

男子と女子で

半々だった。

全く、女の子目当てで

委員会に入るなんて……

紳士として

許せない行為だよ！

って、もしかして

僕が最後なのか？

なんかみんな

待ってる感じだし……

タナマチ・モンジャラ

「君が橘純一君か？」

橘純一

「あ、はい！」

タナマチ・モンジャラ

「とりあえず

最後の1人が来るまで
その机の空いている
席に座っていてくれ。」

橘純一

「はい。」

僕は空いている
席に座る事にした。

しかし、3分待っても
最後の1人が来ないため
図書委員の会議が
始まった。

ここの学校の
図書委員は
クラスに関係なく
2人1組になって
仕事をするので、
今日は自分の組む人を
決める事になった。

残念ながら
男子達の陰謀に
気がついた
タナマチ先生が
星乃さんと
女子を組ませたので
男子生徒達は
殺気立っていた。

まあ、当然の結果だな。

まあ、それはさて置き
僕は自分と組む人が
決まらなかった。

他の人が解散した後
僕とタナマチ先生が

残りの1人を待つために
残っていた。

まあ、誰でもいいけど
なるべく自分の仕事を
人に押し付けない人が
いいな……

● 5分後

??????

「すみません！
遅れました！」

そこに来た人とは……橘純一

「絢辻さん!?!」

タナマチ・モンジャラ

「一体どうしたんだ？」

綾辻つかさ

「すみません、
図書委員の集まり
忘れてました……」

タナマチ・モンジャラ

「まあ、それは
仕方ないな。
でも、遅れたんだから
一緒に活動する人を
勝手に決められても
文句は言えないよな？」

綾辻つかさ

「はい……」

タナマチ・モンジャラ

「君は橘純一君と
組む事になった。」

綾辻つかさ

「橘……純一？」

絢辻さんに
そっくりなその人は
僕の顔を見て固まった。

タナマチ・モンジャラ

「とりあえず
今日は解散したから
次の集まりの時は
忘れるなよ。
橘君にも迷惑が
かかるからな。」

綾辻つかさ

「はい……」

そう言う
と
タナマチ先生は
立ち去った。

綾辻つかさ

「ウザいんだよ、
バーカ」

橘純一

「ええと、君は……」

綾辻つかさ

「あ、橘君
久しぶり！」

橘純一

「久しぶり？
前にどこかで

会ったっけ？」

綾辻つかさ

「って言っても

中学校で何回か

すれ違ったぐらい

だけだね。

私は綾辻つかさ。

橘君と一緒にクラスの

絢辻さんとは

文字が違うの。

橘君とは中学の時に

同じクラスには

ならなかったけど……」

橘純一

「そうなんだ。」

綾辻つかさ

「相変わらず

格好いいな橘君は……」

橘純一

「綾辻さんは
図書委員の仕事って
好きなの？」

綾辻つかさ

「だいっきらい。」

橘純一

「え、それじゃあ……」綾辻つかさ

「ジャンケンで
負けちゃったから
嫌々図書委員にね……」

橘純一

「ははっ、僕と同じだ」

綾辻つかさ

「橘君……と同じ？」

橘純一

「うん、僕も
ジャンケンで負けたから
図書委員になったんだ」

綾辻つかさ

「ふふっ、そっか。」

それにしても、
絢辻さん似の
きれいな人と一緒に
図書委員の仕事が
できるなんて、
幸せにもほどが
あるだろ……

綾辻つかさ

「ねえ、橘君。
せっかく一緒に
委員会になったんだから
一緒にどこかに
行かない？」

橘純一

「え!？」

綾辻つかさ

「ゲーセンでも
ボウリングでも
何でも大丈夫。
私、結構趣味は
多い方だから。」

橘純一

「そ、そう……」

綾辻つかさ

「橘君さえ良かったら
今日にでも……」

橘純一

「い、いや、

今日はちよつと……」

綾辻つかさ

「それじゃあ暇な時はいつでも声かけてね。私はいつでも暇だから」

橘純一

「う、うん……」

綾辻つかさ

「私はD組の廊下側一番後ろの席だから周りの目なんて気にしなくて大丈夫。目立たないから。それじゃあ、まあ後でね。」

橘純一

「う、うん……」

綾辻さんは

嵐のように現れて

嵐のように消えていった

橘純一

「……………」

ノリがいいのか

僕に好意があるのか……

どっちにしても

積極的な子だったな……

僕とは大違いだ……

????.?

(デーン！)

橘純一

「！」

僕は慌てて
後ろを見てみた。

(……………)

おかしいな……

とても強い殺気を
感じたんだけど……

気のせいかな？ 上崎裡沙

{許せないよ……
確かに橘君は

モテるから
他の女の子が
近づくのは分かるけど、
あの人だけは……
あの人だけは絶対に
橘君と仲良く
なっちゃ駄目だよ！
だって、あの方は……
あの方は……橘君に……
あんな事を……

橘君にあんな事を
しておいて
自分が仲良く
なるだなんて……

上崎裡沙

私が守らなくちゃ……
橘君、また悪い子に
騙されちゃうよ……

あたしが橘君を
守らなくちゃ……

(タッタッタッタ！)

綾辻つかさ

〔本当に不快な子……〕

綾辻さんは走り去る
上崎さんを見ていた。

綾辻つかさ

〔全ては決まっている
事なのに……〕

あの子がどれだけ
あがけるか

お手並み拝見でも
しようかな……〕

私と橘君は

最高のクリスマスを迎えるのよ。

それは誰にも邪魔できない。

それは何故なら
橘君をここまで
愛せるのは
私しか居ないんだから。

偶然一緒に図書委員になって、

偶然私が集まりを忘れて
偶然橘君と組む事になっ
て……

やっぱり橘君と
私は一緒に運命……

中学の時は邪魔が入って
ちよつと失敗したけど
今度は上手くいく……

あの子がクリスマスに
余計な事をしたのが
かえって良かったかな？

だって、あの子が
そんな事しないで

素直にあの人に
告白すれば

あの人は……

って、私も人の事
言えないか。

でもクリスマスの事が
あるからこそ

あの子は橘君に
振り向いて貰えない。

橘君に信用して
貰えない……

本当に私の
都合がいいように
全て進んでいる……

橘君、待っててね。

これから

いろいろ練習して

橘君に釣り合う

いいパートナーになって
みせるから……

ふふっ、早く

クリスマスに

ならないかな……

第4話：綾辻つかさ（後書き）

このヒロインは
上崎さんと違って
偶然主人公と
再会しました。

このヒロインは
何者なのか……

それが明らかになるのは
まだまだ先に
なりそうです。

お知らせ

皆さんに残念(?)なお知らせがあります。

グリーの方の
個人用コミュニティに
保存していた
第40話までの話が
全て消されて
しまいました。

その中の1部を
GREEパトルの方が
グリーにふさわしく無い
と判断して
コミュニティごと
全て削除して
しまったのです。

おまけに強制退会と
グリーの使用禁止で
ちよくちよく書いていた
小説の考えやネタも
削除され……

と、いう訳で
せっかく考えた話や
けっこう面白いと

思っていた話も
消えてしまいました。

おまけに作者である私は
書いていた内容を
全て忘れてしまい……

また1から
書き直そうと
考えています。

裡沙ちゃんと
変態紳士の純愛物語を
期待していた方々には
本当に申し訳ない気持ち
でいっぱいです。

これからは
こんな事が無いように
自分のノートや
このサイトに
下書きするようにします

本当にごめんなさい。

とりあえず

最初から書くのは

とても大変なので

綾辻つかさ編の途中から

書き直したいと思います

今まで書いた内容は

全て「白銀編・前置き」

に保存しておきます。

それでは、

就職活動をしながら

小説を書いていきたいと

思います。

紹介・綾辻つかさ

綾辻つかさ

キャッチコピー

「傷ついた天使」

●好きな事（物）

主人公（第1優先）

ゲーム・優しい人

優しい父親

仲良くしていた昔の姉

ネットサーフィン

食べる事（大食い）

運動・音楽を聞く事

エッチな事

（変態紳士の影響）

夜の散歩・寝る事

にぎやかな場所

誰かと話すこと

●嫌いな事（物）

上崎裡沙・先生

紳士に近づく女子達

厳しい母親

よそよそしい姉

自分の右肩にある古傷

親の夫婦喧嘩

料理・洗濯・掃除

家事全般・早起き

勉強（苦手ではない。）

右肩を使う行動

荒らし（ネット中）

人と接しない時間

面倒な事

最悪な家庭環境の中で
生きてきたヒロイン。

小学生の時までは

厳しい母親の用意した

英才教育を

受け入れていたが、

中学生になって

蒔原美佳と

遊びまわる用になり

勉強をしなくなる。

そして、夜遊びの事で
注意してきた姉に
自分の怒りをぶつけて

喧嘩になり、
右肩を痛める。

姉はそれ以来
他人行儀で

優しく接しようとするが
逆効果となり、
ほとんど会話する事が
なくなってしまう。

その後の中学時代にも
暗い過去を持つ。

現在のクラスでは
明るい性格から
男子にモテている。

女子からは変わり者
扱いされているが、
一部の心の広い
女子とは仲良くしている

絢辻さんの容姿で
ありながらも
スタイルは
絢辻さんよりもいい。

言うなれば

第2の森島先輩である。

主人公に対する想いは
裡沙ちゃんと

同レベルであり、

主人公のためなら

自分の嫌な事や

普通はしない事を

平気でしてしまう。

ちなみに橘純一には
一目惚れしたらしい。

第5話：棚町薫

●教室

毎週火曜日は
綾辻さんに
会えるのか……

しかも遊びに行こうって
誘ってくれたし
気軽に誘っても
いいのかな？

もし綾辻さんと
仲良くなれたら
今年は……

（ガブッ！）

橘純一

「うわああああ！」

(ガシャーン！)

橘純一

「いたたたた……」

棚町薫

「あはは！

いいリアクション！」

橘純一

「お前な……」

まったく、また
いつものパターンか……

棚町薫

「純一がボーと
しているのが
悪いのよ。」

橘純一

「普通なら
ボーとしている人の
耳はかじらないと
思うぞ。」

棚町薫

「なーに言ってるのよ、
アンタとあたしの
仲じゃない。」

橘純一

「他人って事だな。」

棚町薫

「うわっ……」

そこまで言う？」

橘純一

「うん。」

棚町薫

「……………そう」

橘純一

「分かったのなら…………」

棚町薫

「今、思い返してみれば
早……………はや……………」

橘純一

「はあ……………もう行く。」

棚町薫

「あ、ちょっと！」

僕は薫を無視して
教室を出た。

こうして、せっかく
可愛い女の子の事を
考えていたのに
薫に邪魔された。

悪いけど今は
薫の相手する
気分じゃないんだよな。

第6話：桜井梨穂子（前書き）

梨穂子は可愛いなあ

梨穂子は可愛いなあ！

梨穂子は可愛いなあ！！

第6話：桜井梨穂子

●食堂

さて、今日は
食堂で食べるとするか。

梅原正吉

「よお、大将
今から昼飯か？」

橘純一

「うん、梅原も来るか？」

梅原正吉

「おう。」

僕は梅原と一緒に

食堂に行く事にした。

●食堂

梅原正吉

「ずいぶん混んでるな」

橘純一

「うん……」

どの席も
空いてないな……

桜井梨穂子

「あ、純一。」

橘純一

「お、梨穂子か。
それに香苗さんも。」

近くで香苗さんと
座っている
梨穂子が声をかけてきた

伊藤香苗

「梅原君、橘君
良かったら
一緒に食べない？」

橘純一

「え、いいの？」

梅原正吉

「助かるぜ。」

よし、それじゃあ

俺達はメシを

買ってくるか。」

橘純一

「うん、そうだね。」

僕と梅原は食おぼから
(食堂のおばちゃん)
お昼を買う事にした。

伊藤香苗

「それでさ、橘君には
アピールしてるの？」

桜井梨穂子

「え、何を？」

伊藤香苗

「『何を?』って……

決まってるじゃない。

例えば、放課後

一緒に帰ろうって

誘ったり

デートに誘ったり

してないの?」

桜井梨穂子

「う、うん……

実は最近あんまり話して
ないんだよね……」

伊藤香苗

「あんたね……」

桜井梨穂子

「あはははは……」

伊藤香苗

「仕方ないなあ……」

桜井梨穂子

「え？」橘純一

「何が仕方ないの？」

伊藤香苗

「お2人さん、
今日は一緒に
帰らない？」

橘純一

「き、今日？」

今日の帰りは梅原と
お宝本鑑賞会が
あるんだよな……

橘純一

「ごめん、今日は……」

梅原正吉

「別に構わないぜ。」

伊藤香苗

「それじゃあ
帰りに校門でね。」

橘純一

「う、梅原……」

桜井梨穂子

「あはははは……
ごめんね〜」

橘純一

「いや、別にいいよ。」

まあ、別にいいか。

最近、梨穂子と
話してなかったし
ちよūdい機huiだな。

こうして放課後は
4人で帰る事になった。

●教室（放課後）

梅原正吉

「わりいな大将、
今日は店の
手伝いがあるのを
忘れてたぜ。
今日は3人で
帰ってくれ。」

橘純一

「うん、分かったよ。」

店の手伝いが
あったって事は
どっちみち
お宝本鑑賞会は
できなかったんだな。

なら梨穂子達と
帰る約束をして
正解だったな。

●校門

桜井梨穂子

「あ、純一。」

橘純一

「あれ、香苗さんは？」

桜井梨穂子

「そ、それが……」

橘純一

「何か急用？」

桜井梨穂子

「う、うん……」

橘純一

「それじゃあ
2人で帰るか。」

桜井梨穂子

「でも……」

橘純一

「でも？」 桜井梨穂子

「2人で帰ったら
噂にならないかな……」

橘純一

「ははは、大丈夫だよ。
中学の時だって
噂になったけど
別に問題なかっただろ？」

桜井梨穂子

「うん、そうだよね。」

橘純一

「それじゃあ

一緒に帰ろうか？」

桜井梨穂子

「うん！」

こうして僕は

梨穂子と一緒に帰った。

よくよく考えてみると

梨穂子と噂になったら

彼女作りづらいよな……

まあ、いいか。

そうなった時は
はつきり違うって言えば
大丈夫だよな。

別に僕と梨穂子は
彼氏彼女って
関係じゃないからな。

第6話：桜井梨穂子（後書き）

梨穂ちゃんは
最初から橘さんに
アピールする
つもりです。

第7話：森島はるか

●3年教室前

ふう……危なかった……

理科の授業中に
急にトイレに
行きたくなった時は
危なかったけど
なんとか間に合った。

ただ、今日は間違っ
て美也のハンカチを
持ってきたちゃっ
たんだよね……

タネウマ君ハンカチ
こんな可愛い
ハンカチを
使っている所を

誰かに見られたら……

って、あれ？

な、ないぞ……

おかしいな……

もしかしたら
さっき使ったトイレに
落としちゃったかな……

??????

「君、もしかして
これを探してる
のかな？」

橘純一

「あ、はい。」

ありがとうございます」

僕は先輩から
ハンカチを
受け取った。

橘純一

「つて、森島先輩！」

森島はるか

「あれ？
どこかで会ったかな？」

橘純一

「な、なんて事だ……
まさか森島先輩が
このハンカチを
拾うだなんて……」

森島はるか

「うーん……」

橘純一

「こんなに可愛い
ハンカチを使っている
男なんて森島先輩
嫌いだろうな……」

森島はるか

「まあ、いいや。
で、君のお名前は？」

橘純一

「あ、僕は1-Aの
橘純一です。」

森島はるか

「そっか、橘君か……
君とは趣味が
合いそうね。」

橘純一

「え？」

森島はるか

「そのハンカチ。
とっても可愛いわよ。」

橘純一

「そ、そうですか？」

森島はるか

「うん、
ベリーグーよ！」

橘純一

「あ、ありがとう
ございます……」あれ？

僕が思ってた展開と
全然違うぞ……

むしろこれは
いい方向に
進んでいないか？

森島はるか

「男の子で
こういうのが
好きな人って
珍しいよね？」

橘純一

「そうですね。」

森島はるか

「ふふ、橘君みたいな
人は初めて。
男の子で可愛い
物好きなんて

めったにいないから。
それに……」

橘純一

「それに？」

森島はるか

「橘君、可愛いし。」

橘純一

「か、可愛い……」

森島先輩に

「可愛い」って
言ってもらえたぞ！

でも可愛いって……

男としては
見られてない
って事だよな……

で、でも！

可愛いって事は
好印象だよな？

誰か、誰かそうだと
言ってくれ！

こうして森島先輩と
友達になった。

綾辻さんと森島先輩
まあ、梨穂子と
薫は除いて……

僕、これから
ハーレム状態に
なるかもしれないな。

も、もし綾辻さんと
森島先輩で
僕の取り合いを
したら僕は……

って、そんな事
ある訳ないよな……

ははは……

第8話：絢辻詞（前書き）

オリキヤラが

チート過ぎる……

第8話：絢辻詞

●教室（放課後）

さて、今日は初めて
綾辻さんと下校するぞ。

紳士として
待ち合わせ場所には
先に行かないとな。

あれ？

手帳が落ちてるぞ……

僕は手帳を拾った。

絢辻詞

「あつた！」

橘純一

「あ、絢辻さん。
これ絢辻さんの？」

絢辻詞

「う、うん……」

橘純一

「そっか、持ち主が
見つかってよかったよ。
はい。」

絢辻詞

「ありがとう……」

どうしたんだろう？

元気ないな……

絢辻詞

「も、もしかして
中見ちゃった？」

橘純一

「ううん、見てないよ」

絢辻詞

「そっか、
よかった……」

橘純一

「それじゃあね。」

絢辻詞

「うん。」

僕は何も見てない……
僕は何も見てない……
僕は何も見てない……

絢辻詞

「橘君、

顔色悪いけど
大丈夫？」

橘純一

「うん、大丈夫だよ。」

絢辻詞

「朝ご飯食べた？」

橘純一

「うん。」

絢辻詞

「図書委員の
仕事で疲れたの？」

橘純一

「そうかもね。」

絢辻詞

「高橋先生は？」

橘純一

「能無し……あ！」

（ガッ！）

絢辻詞（黒）

「見ちゃったんだ……」

橘純一

「い、いや……」

絢辻詞（黒）

「何を言っても
遅いわよ……」

橘純一

「……………」

もう、駄目だな……

クリスマスどころか、
もう明日には……

絢辻詞（白）

「橘君、ちょっと
付き合っ
てもらっていいかな？」

橘純一

「は、はい……」

もう僕の敗北は
決まっている。

無駄な抵抗をするのは
やめておくか……●神社

絢辻詞（白）

「ここなら誰にも
見られないわね。」

橘純一

「そ、そうだね……」

絢辻詞（黒）

「それじゃあ本題。
あなたはどこまで

見ちゃったの？」

橘純一

「え、えつと……
先生の悪口の場所と
殴り書きの所を……」

絢辻詞（黒）

「あなたも
運が悪いわね。
よりによって
最悪の場所だけを
見ちゃうなんて……」

橘純一

「……………」

絢辻詞（黒）

「あーあ、
誰にも気づかれないで
いけると思ったのにな」

橘純一

「ご、ごめんなさい……」

絢辻詞（黒）

「でも、いいわ。」

橘純一

「え……いいの？」

絢辻詞（黒）

「うん、橘君の
口をふさげば
いいだけだし……」

橘純一

「ふさぐって？」

絢辻詞（黒）

「あなたが

消えてくれればいいの。
そうすれば
あたしの秘密が
漏れることもないし……

橘純一

「……………」

お父さん、お母さん
美也、ごめん……

僕、もう駄目だ……

せ、せめて最後に
お宝本を見てから
死にかつた……

?????

「驚きの真実だな。」

橘純一

「え……」

絢辻詞（黒）

「誰!？」

（シュッ!）

絢辻詞（黒）

「きゃあ!」

橘純一

「うわっ!」

（ドーン!）

突然倒れてきた
絢辻さんに僕は
押し倒されてしまった。

（カシヤッ！）

絢辻詞（黒）

「あ……」黒銀龍大

「待たせたな！」

橘純一

「黒銀！」

絢辻詞（黒）

「ど、どこから……」

黒銀龍大

「最初からだよ。
橘がお前の手帳を
読んでいた時。」

橘純一

「え!？」

絢辻詞（黒）

「嘘よ。」

あの時は誰も……」

黒銀龍大

「甘いな。」

黒銀はビデオカメラを
取り出した。

「見ちゃったんだ……」

「い、いや……」

「何を言っても
遅いわよ……」

絢辻詞（黒）

「……………」

黒銀龍大

「どうだ、さらに
この映像なんか……
ほら！手帳の中身が
ちゃんと撮れてるぞ！」

絢辻詞（黒）

「な、何が目的なの？」

黒銀龍大

「俺の親友を

傷つけるな。
それが条件だ。」

絢辻詞（黒）

「何を企んでいるの？」

黒銀龍大

「はぁ？」

絢辻詞（黒）

「こんなに
おいしい情報を
あなたが
それだけのために
使うとは思えないわ。」

黒銀龍大

「いや、俺は使う。
橘は大事な親友だ。
こんな評判の悪い
不良の俺を友として
受け入れてくれた。」

それだけで
充分な理由に
なるだろう？」

絢辻詞（黒）

「要するに、
共存関係にある
橘君がいなくなると
あなたにとって
不利な事がある。
だから理由になる。
そういう事ね？」

黒銀龍大

「……まあ、
それでいい。」

絢辻詞（黒）

「分かったわ。
橘君を消す事はしない」

黒銀龍大

「ああ。」

絢辻詞（黒）

「ただし……」

橘純一

「ただし？」 絢辻詞（黒）

「あたしの事を
誰かに言ったら……」

橘純一

「い、言わないよ！」

黒銀龍大

「交渉成立か？」

絢辻詞（黒）

「ええ。」

橘純一

「と、ところで
1ついいかな？」

絢辻詞（黒）

「何？」

橘純一

「絢辻さんって
猫被ってるの？」

絢辻詞（黒）

「な……」

黒銀龍大

「お前な……」

橘純一

「え、ごめん……」

こうして、絢辻さんの
裏の顔を知ってしまった

でも、何でだろう？

黒銀が来ないで
僕が絢辻さんに
罵られた方が
幸せだったと
思ってしまう……

僕はドMじゃないはず
なのに……

第8話：絢辻詞（後書き）

立場逆転！

作者の感想&反省3（前書き）

作者は悲しいです……

作者の感想&反省3

どうも、作者の
バンダナ・ピカチュン
です。

また新しく小説を
書き直す事にしました。

変態紳士がチート並みに
モテます。

森島先輩に梨穂ちゃん。
絢辻さんに薫さん。

そして綾辻さんの
4人が主なヒロインです

今回の小説は
アマガミのキャラを全て
作者の都合がいいように
書いていく予定です。

こんな絢辻さんも
新鮮でいいなあ……

いやいや、

いくらなんでも

この薫は

キャラ崩壊しすぎだろ！

おいおい、作者は本当に

原作の桜井梨穂子を

知っているのか？

などの声が

聞こえてくる

予感がしますが、

ご了承ください。

あと、作者は

あるサイトで

アマガミや

ギャルゲーマーを

批判する人を見ました。

中1の時から

キミキスをやっていた

作者にとって、

ギャルゲーマーが

批判される事は

作者の人生が

批判された事と
同じですからね。

胸が痛くなって
しまいました……

私の心は折れやすい
ようです……

皆さんはアマガミは
好きですか？

身の回りにアマガミを
やっている人が少ない
作者は本当にアマガミが
好きな人は多いのか
少し心配に
なっていました……

アマガミが好きな人は
ちょっと感想で
作者と同士である事を
教えて下さい。

このサイト内では
アマガミファンが
私だけでない事が
知りたいので……

どうかお願いします。
本当に不安になって

しまつて……

では、今回は

これで失礼します。

心がブルーな

作者でした。

作者の感想&反省3（後書き）

皆さんは

アマガミ好きですか？

第9話：綾辻つかさ編 闇辻さん降臨（前書き）

ここからが本編です。

第〇〇話…☆☆☆☆編

□□□□□

☆☆☆☆

|| この回の主なヒロイン

□□□□□

|| タイトル

こんな感じで

書いていきます。

第9話：綾辻つかさ編 闇辻さん降臨

● 通学路

昨日は酷い目に
あつたな……

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君……………」

橘純一

「あ、綾辻さん
おはよう。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「おはよう……………」

橘純一

「どうしたの、
元気ないね。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君……………ぐすっ」

橘純一

「ど、どうしたの!？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君、私を置いて……………
絢辻さんと……………ぐすっ」

橘純一

「あ……………」

し、しまった!

あまりにも
昨日の出来事が
衝撃が強すぎて
綾辻さんとの約束を
忘れてた……

綾辻つかさ（闇辻さん）

「わ、私……橘君に
彼女がいるなんて
思ってたわ……
私との約束より……」

橘純一

「ご、誤解だよ
綾辻さん！
昨日、実は……」

（……………）

綾辻つかさ

「……………」

橘純一

「信じられないと
思うけど……」

綾辻つかさ

「それなら仕方ないよ」

橘純一

「え……」

綾辻つかさ

「なんだ、

そうだったんだ。

それなら納得だよ。」

橘純一

「許してくれるの？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「だって悪いのは全部
あの女でしょう？
だから橘君は
何も悪くないの。」

橘純一

「そ、そっか……」

綾辻つかさ

「それじゃあ
昨日の分は
一緒に学校行く事で
全部チャラね。」

橘純一

「ははは、それじゃあ
僕にとってご褒美だよ。
綾辻さんみたいな
可愛い人と
学校に行くなんて……」

綾辻つかさ

「そんな、

可愛いだなんて／＼」橘純一

「……………」

か、可愛い！

ちよつと誉めたぐらいで
顔を赤くするなんて
本当に可愛いなあ……

橘純一

「それじゃあ行こうか？

綾辻つかさ

「うん！」

こうして、綾辻さんと
登校する事にした。

それにしても、
綾辻さん……なんか
しゃべり方が
おかしかったよな……

まあ、別にいいか。

第9話：綾辻つかさ編闇辻さん降臨（後書き）

ちなみに闇辻さんの

闇は本当は「病み」です

綾辻つかさ（闇辻さん）

はヤンデレ状態の

綾辻さんです。

第10話：桜井梨穂子・日常（前書き）

とりあえず

第14話までは

フラグ立ての回ですね。

第10話：桜井梨穂子・日常

●テラス

さて、今日は
テラスでゆつくりと
食べようかな。

僕はラーメンを持って
席を探していた。

伊藤香苗

「あ、橘君。」

橘純一

「あ、香苗さん。
それに梨穂子……って
寝てるのか……」

伊藤香苗

「うん。」

まったく、
しょうがない奴だな……

伊藤香苗

「ねえ、私はさ
ちよつと用事があるから
桜井の様子
見ててくれない？
もし寝相が悪くて
イスから落ちたら……」

橘純一

「うん、分かったよ。」

伊藤香苗

「ありがとね。」

橘純一

「別にいいよ。
慣れてるから。」

伊藤香苗

「ふーん、
『慣れてる』ね……」

橘純一

「？」

伊藤香苗

「それじゃ、
よろしくね。」

橘純一

「うん。」

さて、それじゃあ僕は
梨穂子の様子を見ながら
ラーメンを食べるか。

● 5分後

桜井梨穂子

「……………」

橘純一

「起きたか？」

桜井梨穂子

「純一？」

橘純一

「うん、そうだよ。」

桜井梨穂子

「香苗ちゃんは？」

橘純一

「用事があるって言ってどこかに行ったよ。だから僕が香苗さんの代わりに梨穂子の面倒を見てたんだ。」

桜井梨穂子

「……………そっか。」

橘純一

「それにしても、昨日は大変だったなあ…………」

桜井梨穂子

「何が大変だったの？」

橘純一

「実はさ……」 絢辻詞（黒）

「……………」

橘純一

「！」

桜井梨穂子

「実は？」

橘純一

「なななな、何でもない
今のは忘れてくれ！」

桜井梨穂子

「う、うん……」

な、なんだ……

急に寒気が……

橘純一

「あ、そうだ。
実はな……」

僕は適当な会話で
ごまかす事にした。

そして、梨穂子と
いろんな事を話した。

橘純一

「そう言えばさ、
梨穂子は
好きな相手とか
居るのか？」

桜井梨穂子

「え！？
い、いないけど……」

橘純一

「そっか。」

桜井梨穂子

「純一はどうなの？」

橘純一

「僕？」

桜井梨穂子

「やっぱり森島先輩？」

橘純一

「まあ、それも
そうだけど……」

桜井梨穂子

{え……}

(キーン、コーン
カーン、コーン)

橘純一

「さて、昼休みも
終わった事だし、
僕は掃除場所に行くよ。
またな。」

桜井梨穂子

「う、うん……」

こうして僕は

昼休みを梨穂子と
過ごした。

すっかり綾辻さんの事を

言う所だったけど

チャイムのおかげで
助かった。

うん、チャイムは

紳士の必須アイテムだな

桜井梨穂子

「……………」

伊藤香苗

「……………うーん、

ライバルが
出てきそうな
予感ね……」

桜井梨穂子

「どうしよう……」

伊藤香苗

「大丈夫、だって橘君
彼女が居るなんて
言ってなかった
でしょう？」

桜井梨穂子

「それはそうだけど……伊藤香苗

「大丈夫だって。
私と梅原君も
手伝うから。」

桜井梨穂子

「うん……」

でも、本当に

私なんかが

あの人の

彼女を目指して

いいのかなあ……

でも、彼女がいない間は
頑張ってもいいよね？

あの人の近くに居て
いいよね？

伊藤香苗

{はあ……

何か考えておかないと

駄目かもね……}

第10話：桜井梨穂子・日常（後書き）

最後は誰と橘さんを

一緒にしようかな……

第11話：絢辻詞編・橘純一は変な人？

●理科室

なんだ……みんな
後片付け適当だな……

これじゃあ
次に教室を使う僕達が
気持ちよく
使えないじゃないか！

仕方ない。

ここは紳士の僕が
片付けるとしよう。

(……………)

絢辻詞（黒）

「あ、橘君……」

橘純一

「絢辻さん、
来るの早いね。」

絢辻詞（黒）

「あなた、
何やってるの？」

橘純一

「何って……紳士として
理科室を綺麗に
しようと……」

絢辻詞（黒）

「やめてくれない？」

橘純一

「え？」

絢辻詞（黒）

「それはね、

あたしの仕事なの。

あたしが全部やるから

あなたは何も

やらないで。」

橘純一

「で、でも、

2人でやった方が……」

絢辻詞（黒）

「あたしにも

都合があるの。

そのぐらい

分かりなさいよ！」

橘純一

「う、うん……」

何故か怒られて
しまった……

スマート・カビゴン

「やあ、また片付を
してくれているんだね。
ほんと助かるよ。」

絢辻詞（白）

「いえ、私はただ
綺麗にした方が
みんなが気持ちよく
使えると
考えただけです。」

スマート・カビゴン

「橘君、少しは
絢辻さんの
手伝いを……」

絢辻詞（白）

「いいんです。

私が好きで

やってる事ですから。」

スマート・カビゴン

「Z Z Z……」

橘純一

「寝ちゃってるよ……」

絢辻詞（黒）

「この人は授業中にも

寝る最低な教師よ。

会話の途中で寝ても

不思議じゃないわ。」

橘純一

「最低って……優しくて

いい先生なのに……」絢辻詞（黒）

「それじゃあ

片付けましようかね。」

橘純一

「僕も片付けるよ。」

絢辻詞（黒）

「どうして？」

橘純一

「分からない。」

絢辻詞（黒）

「はぁ!？」

橘純一

「いいよね？」

絢辻詞（黒）

「……………え、ええ。」

橘純一

「よし、頑張るぞ！」

こうして僕は
片付けをした。

これで僕も
立派な紳士に
一歩近づいたぞ！

スマート・カビゴン

青春って
いいなあ……………

●授業後

絢辻詞（白）

「ねえ、橘君
ちよつといいかな？」

橘純一

「うん、いいよ。」

僕達はクラスのみんなが
理科室を出るのを待った

絢辻詞（黒）

「ねえ、本当の狙いは
いったい何なの？」

橘純一

「え……」

絢辻詞（黒）

「メリットもないのに
こんな面倒な事を
するなんて
普通の人なら
絶対にしないわよ。」

橘純一

「ぼ、僕はただ
みんなが気持ちよく
授業を受けられるように
しようと
思っただけだよ……」

絢辻詞（黒）

「あなたって
変わってるわね。」

橘純一

「そ、そうかな？」

絢辻詞（黒）

「はっきり言って
変人だと思うわよ。」

橘純一

「……………」

こうして僕は
絢辻さんの中で
変人になった。

僕は変態じゃ
ないのに……

第12話：棚町薫編・2人の関係（前書き）

皆さんのおかげで

累計アクセス数が

10000アクセスを
超えました。

本当にありがとうございます。
ございます。

●累計アクセス数

13761アクセス

●最高アクセス数

2011／06／07
847アクセス

第12話：棚町薫編・2人の関係

●廊下

棚町薫

「……………」

どうしたんだろう？

薫がボーとして
外を見ているだなんて、
今日は雪でも降るのか？

※この時点では
まだ5月です。

橘純一

「おい、どうした？」

棚町薫

「あ、純一……」

橘純一

「何か考え事か？」

棚町薫

「うん、まあね。」

橘純一

「そっか……」

まあ、そういう事もあるよな……

棚町薫

「ねえ、
あたし達の関係って

何だろうね？」

橘純一

「僕達の関係？

うーん、そうだな……

悪友とかじゃないのか？

棚町薫

「悪友か……確かに
しつくりとくるわね。」

橘純一

「それがどうかしたか？

棚町薫

「あのさ、
そろそろ変化があっても
いいと思わない？」

橘純一

「変化？」

変化……………

まあ、意味は
分からないけど、
面白そうだな。

橘純一

「で、変化させるには
どうしたらいいんだ？」

棚町薫

「大丈夫よ。
そこんところは
あたしに
任せなさいって。」

橘純一

「……………」

何か地雷を踏んだような
気がする……

失敗したかなあ……

●次の休み時間

棚町薫

「純一。」

橘純一

「お、薫か。」

棚町薫

「……………」

橘純一

「薫？」

薫は僕との距離を
縮めてきた。

橘純一

「ち、近いつて！
離れろよ！」

棚町薫

「いいじゃないの。
2人の関係を
変えるためなんだから」

橘純一

「……………」

距離を縮めたぐらいで
関係は変わるのか？

だった後で
森島先輩と綾辻さんで
試してみるか……

って、ええ！？も、もしかして
薫の言っていた
関係って、
そういう事なのか！？

橘純一

「ちょ、ちょっと
待てよ薫！
お前の言ってる
関係って言うのは
距離を縮めたぐらいで
変わらないと思うぞ！」

棚町薫

「……………」

橘純一

「ええっと、

何って言うか……」

棚町薫

「あつたまきた！」

橘純一

「え？」

棚町薫

「覚えときなさいよ！」

橘純一

「あ、ちょっと待てよ！」

こうして、

薫を怒らせてしまった。

まさか薫が

そんな事を言っ
てくるなんてな……

でも、そういうのも
悪くないよな……

第12話：棚町薫編・2人の関係（後書き）

久々にアクセス数を見てみたら

ブルーな気持ちもすっかり晴れました。

これからは

明るい気持ちで小説を書いていきます。

この小説をご覧の皆さん

本当にありがとうございます。
ございます。

第13話：森島はるか・森島先輩は憧れの人

●校庭

橘純一

「森島先輩、
好きです！」

僕と付き合ってください！

森島はるか

「橘君……」

僕はクリスマスのために
大胆にも森島先輩に
告白してしまった。

森島はるか

「ありがとね。」

橘純一

「え？」

森島はるか

「直接告白してきた人は
あなたが初めて
だったから……
橘君って意外と
男らしいんだね。」

橘純一

「え、それじゃあ……」

森島はるか

「でも駄目。

私、年上で

頼りがいのある

男の人が好きなの。

だから……ごめんね。」

橘純一

「そうですか……」

森島はるか

「それじゃあ、
また明日ね。」

橘純一

「あ、はい……」

ふられたんだよね……

告白なんて
しなければ
良かったか？

で、でも……

「男らしい」って
言って貰えたぞ！

し、しかも

「また明日ね。」
って言ってたし……

もしかしたら

森島先輩の中で

僕は男らしい後輩に
なったんじゃないのか？

しかも、また会っても
別にいいみたいだし……

これはむしろ

大成功じゃないのか！？

よし、頑張るぞ！

森島先輩、僕
年上の男性には

なれませんが、
頼りがいのある
男性になれるように
頑張ります。

こうして僕は
森島先輩に振り向いて
もらえるような
立派な男になれるように
努力した。

プロレスをやったり
（1回で挫折）
毎朝早起きして
近所を走り回ったり
（梨穂子がかかなり
感心していた。）
紳士力を上げるために
お宝を禁止したり……
（今でも禁断症状と
戦っている。）

僕はもう一度
森島先輩に告白しても
恥ずかしくない
男になった。しばらくして

● 図書室

よし、毎日マラソンを
しているから
体力はついたぞ。

あとは勉強して
頭をよくしないとな。

森島はるか

「……………」

あ、あれは
森島先輩じゃないか！

寝ちゃってるよ……

今日は少し寒いから
風邪引いちゃうかも
しれないな……

僕は自分の制服を
森島先輩に
かけてあげた。

よし、変態が
森島先輩を
襲わないように
僕が森島先輩を
守らないとな。

僕は森島先輩の近くで
勉強する事にした。

● 1時間後

森島はるか

「わんちゃん……
あ、あれ、橘君？」

橘純一

「森島先輩、
起きましたか？」

森島はるか

「うん、この制服
橘君にかけて
くれたの？」

橘純一

「あ、はい。
少し寒いなあ……
と思ったので。」

森島はるか

「え、それじゃあ
橘君が風邪ひいちゃう
かもしれないわよ？」

橘純一

「僕は大丈夫ですよ。
毎日、体を
鍛えているので。」

森島はるか

「あ、そうなんだよね。
橘君、毎朝
走ってるんだよね。」

橘純一

「え、何で森島先輩が
その事を……」

森島はるか

「噂を聞いたから
ちよっと見に行ったの。
そしたら橘君、
本当に走ってるんだもん
びっくりしちゃった。」

橘純一

「そうなんですか。」

森島はるか

「橘君、勉強も
頑張ってるみたいね。」

橘純一

「え？」

森島はるか

「とぼけても無駄よ。
だって今、
勉強してたでしょ？」

橘純一

「ははは……」

うーん、本当は
影で努力するつもり
だったんだけどなあ……森島はるか

「ねえ、どうして
いきなり体を
鍛えて始めたの？」

橘純一

「森島先輩に
振り向いて
もらえるような
男になるためです。」

森島はるか

「え……」

橘純一

「僕、年上の男性には
なれませんが、
森島先輩の求めるような
頼りがいのある
男性になりたくて
頑張っていました。」

森島はるか

「そ、そうだったんだ」

橘純一

「森島先輩、
好きです！」

森島はるか

「……………」

橘純一

「……………」

森島はるか

「どうして?」

橘純一

「え?」

森島はるか

「どうして2回も
告白してくるの?」

橘純一

「すみません。

でも、僕は

1度ふられたぐらいで

先輩を諦める事が

できないんです。

もし森島先輩が

迷惑だと思えばなら

僕はもうやめます。」

森島はるか

「迷惑なんか

………してないよ。」

橘純一

「え？」

森島はるか

「全然、
迷惑じゃない………」

橘純一

「そ、それじゃあ
森島先輩の事を
諦めないで
いいですか？」

森島はるか

「もう、何でそんなに
真剣なの！？」

橘純一

「す、すいません……」

森島はるか

「もう……

これでもくらえっ!!」

(チュッ)

橘純一

「え………」

森島はるか

「……………」

い、今、森島先輩
僕の眉毛に……

橘純一

「も、森島先輩……」

森島はるか

「何？」

橘純一

「い、今、

僕の眉毛に……」森島はるか

「必死になってる

君の困り眉毛が

可愛かったから

キスしたの。」

橘純一

「そう……ですか。」

森島はるか

「あ、眉毛

乱れちゃったね。」

橘純一

「あ……」

こうして、森島先輩に
キスされてしまった。

森島先輩に
キスされた……

最高じゃないか！

最高過ぎる……！

もう最高……！！

しかも、森島先輩に
乱れた眉毛を
直してもらって……

夢じゃないよな？

だ、誰か夢じゃないと
言ってくれ！

第14話：絢辻詞編・あなたは どうして……

●放課後

さて、梅原との
危ない取引も無事
終わった事だし、
教室に鞆を
取りに行くか。

●教室

あ、絢辻さんだ。

あんなにたくさんの
プリントを一度に

持っ
てい
こう
と
し
て
る
……

橘
純
一

「絢
辻
さん。
」

絢
辻
詞
（黒）

「あ、
橘
君。
」

橘
純
一

「あ、
あの
さ……
」

絢
辻
詞
（黒）

「何？
」

ま、
待
て
よ
……

「手伝おうか？」

って、聞いたら

断られるような

気がする……

「手伝わせて下さい！」

これも、

「あたしにも

都合ってものがあるの。

そのぐらい

分かりなさい！」

って、言われそうな……

なら……

橘純一

「途中までそれを
運ばせて下さい！

あ、絢辻さんの

都合のいい所までで

いいから……」

絢辻詞（黒）

「別にこんな事したって
あなたには

何のメリットもないわよ？」

橘純一

「メリット？」

絢辻詞（黒）

「何も考えないで人を手伝うの？」

橘純一

「う、うん……」

僕はただ、絢辻さんがこんなに重いのを運ぶのは

大変だろうなあ……って、思ったから。」

絢辻詞（黒）

「……………そう。」

橘純一

「それで、
どこまで運べば
いいのかな？」

絢辻詞（黒）

「そうね……」

●職員室前

絢辻詞（黒）

「ここでいいわ。」

橘純一

「はあ……はあ……
うん、分かったよ……」

結局、僕がほとんど
運んであげた。

まあ、絢辻さんの
力になれたのなら
このぐらいの事は……●次の日

絢辻詞（白）

「ねえ、橘君。
ちよっといいかな？」

橘純一

「どうしたの？」

絢辻詞（白）

「ちよっと

屋上で話さない？」

橘純一

「う、うん……」

●屋上

絢辻詞（黒）

「ねえ、1ついい？」

橘純一

「何かな？」

絢辻詞（黒）

「あなたが人のために
無償で働くのは
何故なの？」

橘純一

「え、特に理由は
ないけど……」

絢辻詞（黒）

「自覚なしか……」

橘純一

「？」

絢辻詞（黒）

「もういいわ。」

そう言うと絢辻さんは

行ってしまった。

何でそんな事を不思議に
思うんだろう？

別に僕は
ごく普通の事を……

あ、あれは森島先輩！

橘純一

「森島先輩！」

第15話：全ヒロイン・それぞれの想い（前書き）

全ヒロインの

「一方そのころ」

十変態紳士の悪夢です。

ちなみに、第14話から
しばらく経っています。

第15話：全ヒロイン・それぞれの想い

● 棚町家のお風呂

棚町薫

「……………」

目を閉じれば

すぐに浮かんでくる

近くて遠い……

純一の顔が

うん、こういうのを

恋って言うんだ……

ずっと見てきたんだもん

ずっと……

誰にも渡したくない
あたしだけを
見ていて欲しい……

わがまま

我侭 なあたしの
ワガママ。

あたしはいつも
純一が近くに居ると
楽しくて笑った。

気づけば簡単だった。

だけど……

問題は山積み。

ねえ、純一……

あんたはどれだけ
フラフラすれば
気が済むの？

お願いだから
はつきりしてよ……

●森島先輩の部屋

森島はるか

……全然

頭に入ってこない。

……。

あゝもう、

何なのこの感じは……。

すっきりしないなあ……

橘君の事を考えると、
胸が締め付けられる。

こんな感じ初めて……。

橘純一……。。

他の男の子とは
ちよつと違うなあ。
何でだろう？

……まあ、いつか！

そのうち
分かるんじゃないかな？

うん。㇏

森島はるか

「よし、
お風呂入ろっ！」 ●綾辻つかさの部屋

綾辻つかさ

〔橘君……私にとって
彼はとても大事な人。〕

一目惚れしてから早3年

あの時は遠くから
眺めるだけだった……

何故なら、あの人は
私の親友である
美佳ちゃんを
見ていたから。

私は大切な友達と
彼がお似合いだと思って
我慢してきた……
〜

(……………)

綾辻つかさ（闇辻さん）

「まあ、最初から
分かってはいたわ。

あのバカ女と橘君は
上手くないかって……

ちょっと私が

手を加えただけで
すぐ壊れたし、

やっぱり

別れさせて正確ね。

しかも美佳は

私が頼んだら

上崎さんの事は橘君に
べらべらしゃべって、

私の事は黙って
くれて……

ふふっ、あとは

邪魔な女と橘君が

別れるのを待っただけ……

私は何があっても

橘君と離れないけど

他の女は

ちよっとした事で

別れるに決まってる。

確かに彼は優柔不断で
不真面目な人だけど……

人の幸福を願い、

人の不幸を

悲しむ事ができる。

私はきっと

そんな橘君に

恋したのね。

どこかの誠とは

えらい違いよ。

優柔不断なところには

ちよつとムカツと

するけど……

それでも私は橘君と

一緒に居たいから……

彼の優しさの中で

生きたいから……
〜

綾辻つかさ

〔橘君、大好き。〕 絢辻詞（黒）

〔橘君……か。〕

本当に不思議な人ね。

人の為に何かを

する行為は、

結局自分の身に返る。

ああいうタイプの人は、
後一歩先を見通せれば、
上手く生きられるのに。

それとも、私とは違う
価値観を
持ってるのかな？

ちょっと

気になるかも……

……あれ？

そういえば、
私が誰かを
気にするなんて、
もしかして

初めてじゃない？

ふふふっ、変なの。

も・し・か・し・て

……詞、お気に入り？

……………。

ああっ、もう！

何考えてるんだろ、
あたし。

もう休憩終わりっ！
さくっと

古文の予習して
お風呂

入らなくっちゃ！
ㇿ

● 梨穂ちゃんの部屋

桜井梨穂子

「ねえ、シュナイダー」

シュナイダー

「何だい？」

桜井梨穂子

「最近あの人と
よく話すんだ」

シュナイダー

「ほうほう、
どうやら順調
みたいだね。」

桜井梨穂子

「うふふっ」

シュナイダー

「良かった良かった」

桜井梨穂子

「もしかすると……
……さ……そのうち
恋人同士になるかも
しれないんだ。」

シュナイダー

「……………」

桜井梨穂子

「シュナイダー？」

シュナイダー

「……………」

桜井梨穂子

「疲れちゃったのかな？
うーん、とりあえず
お風呂に入ろうか？」

シュナイダー

「……………」 ● 夢の中

橘純一

「ここは………」

伊藤誠

「よう。」

橘純一

「なんだ、誠か。」

伊藤誠

「その言い方は
ないだろ？」

橘純一

「ははっ、ごめん。
冗談だよ。」

伊藤誠

「まったく……」

橘純一

「で、どうしたの？」

伊藤誠

「『どうしたの？』
じゃないよ。」

お前、最近
モテてるよな？」

橘純一

「そうなんだよ！
ついに森島先輩に……」

伊藤誠

「森島先輩だけ
じゃないだろ？」

橘純一

「え？」

伊藤誠

「綾辻。」

橘純一

「あ、そうなんだよ。
綾辻さん、なんか僕に
積極的でさ……」

伊藤誠

「絢辻さん。」

橘純一

「なんか絢辻さん
僕に興味がある
みたいで……」

伊藤誠

「棚町と桜井。」

橘純一

「は、例外として……」

伊藤誠

「いいか？
みんなお前の事を
好きなんだぞ。
もし、全員がお前に
積極的になったら
どうなるか分かるか？」

橘純一

「どうなるの？」

伊藤誠

「自分の目で
確かめろよ。」

橘純一

「も、もしも僕が
選べないって
言ったら……」

伊藤誠

「それなりの
覚悟がないと
駄目だろうな。」

橘純一

「僕は……みんなと
仲良くしたい……」

伊藤誠

「だよな（笑）」

ハッスル・ポツチャマ

「お前らな……」

橘純一

「だ、誰!？」

ポツチャマ

「作者の親友である
ハッスル・ポツチャマだ

橘純一

「ハッスル……
ポツチャマ？」

※実際は作者の親友を

作者が再現した
キャラクターです。ポツチャマ

「いいか？

とりあえず

俺の話を聞け。」

橘純一

「う、うん……」

ポツチャマ

「俺はな、キミキスで
お前と同じ状況に
陥った事がある。」

橘純一

「僕と……同じ？」

ポツチャマ

「俺の場合、
摩央姉と星乃さんと
深月ちゃんに

モテモテだった。」

ピカチュン

「初プレイで
よくやったよね。」

ポツチャマ

「まあな。

だが、俺の迎えた
エンディングは

B A D E N D

だった……」

橘純一

「3人も仲のいい

彼女が居て？

いったいどうして……」

ポツチャマ

「俺がメインで

進めていた摩央姉に
見つかっちゃったん

だよ！」

橘純一

「な、何を？」

ポツチャマ

「星乃さんとの
初々しい恋と
深月ちゃんとの
いけない恋をだよ！」

橘純一

「そ、それで
摩央姉は……」

ポツチャマ

「フラフラするような
軽い男は嫌いだった
みたいでな……」

橘純一

「……………」

ポツチャマ

「アマガミの
初プレイの時は
森島先輩と薫と
アイアイを
同時攻略した。」

橘純一

「そ、それで
どうなったの？」

ポツチャマ

「最初はな、
アイアイとは遊びで
森島先輩と薫が
メインだった。
けどな、
優柔不断なこの俺を
アイアイは
許してくれたんだ。
さらに、アイアイは

まだ自分にも
チャンスはあると
俺の事を諦めないで
くれた。
その時、
俺は決めたんだ。」

橘純一

「何を？」

ポツチャマ

「スキ状態の
森島先輩と薫を放置して
アイアイだけを
愛したんだ。」

橘純一

「え！？
森島先輩を
放置って……」

ポツチャマ

「いいか、紳士よ？」ポツチャマ

「恋はその人の
いい所を好きになる事。
愛はその人の
悪い所も好きになる事。
つまり、俺の本質である
優柔不断を
分かった上で
俺を愛していた
アイアイは！
俺を愛して
いたんだよ！」

ピカチュン

「また始まったよ……」

橘純一

「だ、だって
他の2人だって……」

ポツチャマ

「分かってないな。
いいか？」

俺の持論でいくと
逆境の中でも
頑張るアイアイこそが
他の2人よりも
輝いていると
思うんだ。」

橘純一

「そ、そっか……」

ピカチュン

「まあ、
スキ状態の2人を
放置して
ナカヨシの
ヒロインを攻略した
ポッチャマは
ある意味すごいと
思うよ。」

ポッチャマ

「まあ、俺は
キミキスの世界では
失敗している。」

紳士には俺の
アマガミの時のような
素晴らしいドラマを
見せて欲しいと
思っている。
ピカチュン、
頑張ってくれよ。」

ピカチュン

「了解（へ、▽、ゞ」

橘純一

「ちょ、ちよつと
待ってよ！
なんで僕を
応援しないの！？」

ポツチャマ

「俺的には一番
綾辻さんが
可能性が低いと
思うんだが……」

ピカチュン

「いや、まだ決める
ないですけど、
梨穂ちゃんが性格的に
可能性が低いかと……」

橘純一

「かつ、勝つてに
決めないでよ！
選ぶのは僕なんだ！」

ポツチャマ

「神は言っている。
細かい事を気にしては
いけないと……」

●変態紳士の部屋

夢……………か。

橘純一

「……………」

そうだな、
早く決めないと
取り返しのつかない事
になるよな……

で、でも

僕は誰を選べば……

第15話：全ヒロイン・それぞれの想い（後書き）

変なフラグが

いっぱい立った状態で

リア充性格が

始まります。

森島はるか・スキ

○棚町薫○・アコガレ

桜井梨穂子・スキ

□絢辻詞■・アコガレ

綾辻つかさ・スキ

第16話：桜井梨穂子僕にとって梨穂子は……（前書き）

ハッスル・ポツチャマ

「それにしても、
モテる男ってのも
大変だよな……
モテる男の気持ち
俺にはよく分かるぜ。」

バンダナ・ピカチュン

「ポツチャマがモテる？
二次元の中
限定だよね？」

ハッスル・ポツチャマ

「もちろんだ。
俺達が女子に
モテた事なんて
あるか？」

バンダナ・ピカチュン

「あるよ。」

二次元の世界で（笑）」

ギャルゲーマー2人

「ははははは！」

リアルでは

こんな話ばかり

ポッチャマ（偽名）と

話している作者です。

二次元の世界に入って

二見さんと結婚したい

と本気で思っている

作者は末期かも

しません（「∀」）

第16話：桜井梨穂子僕にとって梨穂子は……

●屋上

梅原正吉

「大将、
ちょっといいか？」

橘純一

「どうした？」

梅原正吉

「実はな、桜井さん
ラブレターを
貰ったみたいなんだ。」

橘純一

「……………そうか。」

梅原正吉

「……………」

まあ、森島先輩と
付き合っている僕には
関係ないよな……

梅原正吉

「ちなみに
手紙を出したのは俺だ」

橘純一

「ふーん……」

梅原正吉

「差出人の名前は
お前にしておいた。」

橘純一

「そっか……」

……って、え？

今何って……」

梅原正吉

「差出人の名前は
お前にしておいた。」

橘純一

「ええっ!？」

梅原正吉

「理由は分かるな？」

橘純一

「わ、分かるけど……」

梅原正吉

「そういう事だ。」

橘純一

「……………」

梅原正吉

「ちなみに放課後、
工事中の橋に
待ち合わせだ。」

橘純一

「ぼ、僕には
無理なんだ……
梨穂子に会う事は
できない……」

梅原正吉

「お前は桜井さんを
待ちぼうけさせる気か？」

橘純一

「……………」

梅原正吉

「お前はそんな事が
できない奴だって事を
俺は知ってるぜ。」

橘純一

「……………」

確かに待ちぼうけ
させるのは
可哀想だ……

待ちぼうけされる事が
どんなに辛いかは
僕が一番知っている。

これは梅原の
イタズラだって

正直に言えば
いいじゃないか。

うん、そうだ。

それで
いいじゃないか……●工事中の橋

もう……来てるな……

まあ、当然だよな……

橘純一

「よう、梨穂子……」

桜井梨穂子

「純一？」

橘純一

「う、うん……」

梨穂子の奴、
どんな手紙を
貰ってたんだろ？

内容によっては……

橘純一

「え、ええつと
……待ったか？」

桜井梨穂子

「ううん、全然。」

橘純一

「そうか……」

桜井梨穂子

「えへへ……………」

あの手紙、

梅原君と香苗ちゃんの
イタズラなんだよね？」

橘純一

「な、何だ

分かったのか……………」

僕はちよつと安心した。

桜井梨穂子

「あはは……………」

ごめんね」

橘純一

「何で梨穂子が

謝るんだよ。」

桜井梨穂子

「そ、そうだよね……」

橘純一

「そうだよ。」

桜井梨穂子

「……………」

橘純一

「どうした？」

桜井梨穂子

「……………」

橘純一

「梨穂子？」

桜井梨穂子

「……………もしも」

橘純一

「もしも？」

桜井梨穂子

「これが

イタズラじゃなかったら
いいのになって……」

橘純一

「え……」

桜井梨穂子

「私はそう思った……」

橘純一

「梨穂子……」

ぼ、僕は
どうしたら……

●選択肢

- ・僕もそう思った。
- ・僕には森島先輩が……
- ・帰るか。

ピカチュン

「3つ目はないですね」

ポツチャマ

「俺だったら
2番目だけは
選ばないな……」

● 選択肢

・ 僕もそう思った。

× 僕には森島先輩が……

× 帰るか。

橘純一

「あ、あれ？」

僕の頭の中に選択肢が

1つしかないぞ……

何でだろう？」橘純一

「僕も……」

桜井梨穂子

「え？」

橘純一

「僕も悪戯じゃなければ
よかったって
思った……」

桜井梨穂子

「どういう事？」

橘純一

「も、もしも

僕が梨穂子の
気持ちを

分かっていたら……」

桜井梨穂子

「純一……」

そうだな、

梨穂子は昔から

僕の事を……

橘純一

「ただ、僕はまだ

自分の気持ち
まだ分からないんだ。
だから……
幼なじみから
少し進みたい。
例えば、『遊びに行く』
から『デートする』に
したり……」

桜井梨穂子

「純一……」

橘純一

「それでもいいなら
僕、梨穂子と……」

次の瞬間……

桜井梨穂子

「ん……」

橘純一

「り、梨穂子！」

桜井梨穂子

「……………」

橘純一

「んんっ！」

や、柔らかい……

（……………）

桜井梨穂子

「えへへ……………」

橘純一

「お、お前……」

桜井梨穂子

「これで一歩
前進だね？」

橘純一

「ま、まあな……」

こうして僕は
梨穂子とキスした。

橘純一

「……………」

はぁ……

第16話：桜井梨穂子僕にとって梨穂子は……（後書き）

バンダナ・ピカチュン

「こうでもしないと
紳士は浮気して
くれないですからね。」

ハッスル・ポツチャマ

「作者パワー全開だな」

バンダナ・ピカチュン

「1章で橘さんに
選ばれなかった
ヒロイン達も
2章では幸せに
する予定なので
安心して下さい。」

ハッスル・ポツチャマ

「それにしても、
やっぱりヒロインは
同時攻略してこそ

真の美しさが
分かるってもんだ。」

バンダナ・ピカチュン

「ただし、私の小説では
そうとも限らないですね
原作と違って
ヒロイン達の性格も
違いますからね。」

ハッスル・ポツチャマ

「確かに俺の大好きな
絢辻さんと薫が
手抜きのような
気が……」

バンダナ・ピカチュン

「作者は好きと苦手が
はっきりしているので
仕方ないですよ……」

ハッスル・ポツチャマ

「お前は摩央とか
薫みたいなタイプの人と
絢辻さんとか夕月先輩
みたいな人が
苦手なんだよな？」

バンダナ・ピカチュン

「はい……ツンデレと
自分より立場が上の人、
あと僕は薫さんみたいな
人はちよつと……
好きなんですけど
どちらかと言うと
梨穂ちゃんとか
中多さんみたいな人が
好みですからね。」

ハッスル・ポツチャマ

「お前は後輩キャラと
癒し系が好きだからな。
俺は先輩キャラと
絢辻さんみたいな
人は大好きだな。」

『絢辻さんは
裏表のない素敵な人です
はい、復唱！』

バンダナ・ピカチュン

「復唱したい所ですが、
制限文字数が

近づいているので
また今度復唱します。」

ハッスル・ポツチャマ

「もしかすると
文字数が多いのは
俺達の長い名前が
原因じゃないのか？」

バンダナ・ピカチュン

}}はっ！「□。□。」}}

(続く……)

第17話：綾辻つかさ綾辻さんが立ち止まっているぞ………どうしたんだろうっ

バンダナ・ピカチュン

「橘さんが

女の子を攻略するように
綾辻さんも

橘さんを攻略しています

ハッスル・ポツチャマ

「主人公がヒロインに
攻略されるのか……」

バンダナ・ピカチュン

「ときメモ4の大倉さん
キミキスの菜々ちゃん。
アマガミの裡沙ちゃん
みたいな感じですかね？」

ハッスル・ポツチャマ

「みんなヤキモチ妬き
だな……」

バンダナ・ピカチュン

「作者はヤンデレ
大好きですからね。」

ハッスル・ポツチャマ

「ははは……」

第17話：綾辻つかさ綾辻さんが立ち止まっているぞ……どうしたんだろうっ

●通学路

さて、今日も
早起きできたぞ。

こんなに清々しい
朝を満喫するなんて
まるで紳士じゃないか。

(……………)

あ、あれは綾辻さん。

何をやって
いるんだろう？

ちょっと行ってみるか。

犬

「ワンワン！」

綾辻つかさ

「……………」

橘純一

「綾辻さん、
どうしたの？」

綾辻つかさ

「あ、橘君！」

（ギュ……）

橘純一

「あ、綾辻さん？」

綾辻つかさ

「……………」

綾辻さんは急に
抱きついてきた。

橘純一

「もしかして……
犬が怖いのか？」

綾辻つかさ

「うん………」

橘純一

「そっか………」

こ、これは紳士として
どうにかしないと……

橘純一

「よ、よし！

綾辻さん、
僕が壁になるから
そのスキに
ここを通るんだ！」

綾辻つかさ

「で、でも
それじゃあ
橘君が……」

橘純一

「こんなに大きい犬に
襲われたら
怪我しちゃうよ！
僕は女の子を
危険な目に
あわせる事はできない！

綾辻つかさ

「橘君……」

橘純一

「よし……行くぞ！」

犬

「ワンワン！」

(……………)

橘純一

「はぁ……はぁ……」

綾辻つかさ

「橘君、大丈夫？」

橘純一

「う、うん……」

僕、頑張った。

頑張ったよな？

綾辻つかさ

「あんなに大きい犬に
1人で立ち向かって……
橘君、格好よかったよ」

橘純一

「そ、そうかな？」

綾辻つかさ

「うん、とっても
かっこ良かった。」

やったぞ！

頑張って良かった……綾辻つかさ

「橘君、ありがとう。」

(チュツ)

橘純一

「え……」

綾辻つかさ

「……………」

い、今、キス……
されたよな？

綾辻さんに
キスされたよな！？

綾辻つかさ

「あはは、橘君
顔真っ赤……」

橘純一

「あ、綾辻さん
こそ……」

綾辻つかさ

「あははっ！
お互い様だね。」

橘純一

「い、今のは……」

綾辻つかさ

「お礼。」

橘純一

「……………そっか。」

こうして綾辻さんに
キスして貰った。

しかも唇に。

これで3人目だけど……
い、いいのかなあ？

● 帰り道（放課後）

綾辻つかさ

「シロ、今日
はご苦労さま。
あなたのおかげで
橘君にキスする
口実ができたよ。」

犬_{シロ}

「ワンワン！」

綾辻つかさ

「さあ、おばあちゃん
のお家に帰りなさい。」

犬_{シロ}

「ワンワン♪」

ふふっ、まさか
おばあちゃんが
飼い始めた犬が
こんなところで
役に立つなんてね……

シロのおかげで
橘君にキスする
口実もできたし……

しかも唇に！

もう幸せ過ぎて
頭がクラクラする……

家でにやけないように
気をつけないと……

上崎裡沙

「……………」

第17話：綾辻つかさ綾辻さんが立ち止まっているぞ……………どうしたんだろうっ

ハッスル・ポツチャマ

「おいおい、紳士さん
大丈夫か？」

バンダナ・ピカチュン

「さあ（∀）」

ハッスル・ポツチャマ

「……………」

第18話：棚町薫編・変わらない日常（前書き）

皆さんのおかげで

1日の最高アクセス数が
更新されました。

ありがとうございます。

●最高アクセス数

2011／06／09

1019アクセス

第18話：棚町薫編・変わらない日常

●教室

うーん、アンケートで
将来の進路を
答えなくちゃ
いけないんだけど……

アンケートだから
適当に答えても
大丈夫か？

まあ、いちよう
参考までにも
薫の進路でも
聞いておくか……

橘純一

「薫、ちょっといいか？」

棚町薫

「あ、純一、何？」

橘純一

「お前ってさ、
どんな人生がいいの？」

棚町薫

「ぷっ……まさか
純一から
そんな言葉が
出てくるなんて……」

橘純一

「ぼ、僕はいつも
真剣だぞ！」

棚町薫

「じゃあ、あんたはさ
どんな人生がいいの？」

橘純一

「僕は力士になる！」

棚町薫

「そ、その考えは
なかったわ……」

橘純一

「で、薫は？」

棚町薫

「そうね……
あたしは別に
このままで
いいと思うわ。」

橘純一

「つまり、
何も考えてないの？」

棚町薫

「そうじゃないわよ！
ただ、あたしは
あんたとこうして
いるのも悪くないと
思っただけよ。」

橘純一

「はは、確かにね。
僕も薫と一緒に居ると
楽しいし……」

棚町薫

「でしょう？」

そっか……

薫もちゃんと
考えているんだな……

棚町薫

「で、力士になったら
どうするつもりなの？」

橘純一

「もちろん、
横綱になって
○ッカーするよ。」

棚町薫

「仕方ないわね……
私が親方になって
あんたをビシビシ
指導しないと……」

橘純一

「……………」

棚町薫

「純一？」

橘純一

「ごめん、薫。

ちょっと

用事を思い出した！」

棚町薫

「あ、ちょっと！」

（タッタッタッタッ！）

棚町薫

（また逃げられた……）

第18話：棚町薫編・変わらない日常（後書き）

皆さんのおかげで

小説を書く事が

楽しくなってます。

毎日アクセス数を見ると

本当に励まされます。

第19話：森島はるか・ヤキモチ

●教室

橘純一

「もちろん、

横綱になって

○ッカーするよ。」

棚町薫

「仕方ないわね……

私が親方になって

あんたをビシビシ

指導しないと……」

橘純一

「……………」

あ、今、廊下に居たのは
森島先輩じゃないか！

で、でも……

棚町薫

「純一？」

橘純一

「ごめん、薫。

ちょっと

用事を思い出した！」

棚町薫

「あ、ちょっと！」

（タッタッタッタッ！）

ど、どうしてだろう？

目が合った瞬間
目をそらされたぞ……

● 廊下

橘純一

「森島先輩！」

森島はるか

「あ、橘君……」

橘純一

「はあ……はあ……」

森島はるか

「もしかして……」

橘純一

「はい、教室から
森島先輩が見えたので
追いかけてきました。」

森島はるか

「……………」

な、何だろう？

なんだか森島先輩の顔が
寂しそうって言うか……

橘純一

「と、ところで
森島先輩はどうして
僕の教室に……」

森島はるか

「そ、それは……
君と話した
かったから……」

橘純一

「え？」

森島はるか

「だけど、君が
可愛い女の子と
仲良くしてるから……」

橘純一

「……………」

ま、まさか森島先輩……

橘純一

「ヤキモチ……ですか？」

森島はるか

「や、ヤキモチなんか妬いてない！」

橘純一

「そ、そうですか……」

で、でも、これは……

森島先輩が

ヤキモチを……橘純一

「でも僕は森島先輩が
一番ですから……」

森島はるか

「え……」

橘純一

「そうじゃなかったら
僕はここまで

森島先輩を

追いかけて

きませんでしたよ。

僕は森島先輩が

一番なんです。

森島先輩以外の女の子と

一緒になるなんて

絶対に考えません。

だから森島先輩は

何も心配しなくて

大丈夫です。」

森島はるか

「橘君……」

お、なんだか
いい雰囲気……

森島はるか

「も、もう……

何でいちいち

格好いいのかなあ……」

橘純一

「え!？」

森島はるか

「な、何でもない!」

橘純一

「そ、そうですか……」

森島はるか

「ふふっ、
それじゃあ
またね。」

橘純一

「あ、はい！」

こうして誤解は解けた。

むしろ、いい方向に
進んでないか！？

森島先輩が僕の事を
格好いいって……

あの森島先輩に
格好いいって
言われたぞ！

ああ……僕、
こんなに
生きててよかったと
思ったのは
生まれて初めてだ……

森島先輩……

僕、森島先輩に
格好いいと言われた
男として
恥ずかしくない
男になります！

バンダナ・ピカチュンハッスル・ポツチャマの雑談コーナー1前編（前書き）

本編を楽しみたい人は
飛ばして下さい。

バンダナ・ピカチュンハッスル・ポツチャマの雑談コーナー1前編

バンダナ・ピカチュン

「アヤツジサンハ
ウラオモテノナイ
ステキナヒトデス」

ハッスル・ポツチャマ

「てきとうだな……」

絢辻詞（黒）

「……………」

バンダナ・ピカチュン

「絢辻さんは
裏表のない
素敵な人です！」

ハッスル・ポツチャマ

「絢辻さんは

裏表のない
素敵な人です。」

バンダナ・ピカチュン

「と、いう訳で
どうも、作者こと
ピカチュンです。」

ハッスル・ポツチャマ

「同じく、作者の
ポツチャマです。」

バンダナ・ピカチュン

「ちょ、ちよつと！
いちよう君は
僕の親友っていう
設定なんだから！」

ハッスル・ポツチャマ

「だいたい、
その親友に
許可とったのかよ……」

バンダナ・ピカチュン

「僕が裡沙ちゃんの
純愛物語を

書いていた時には
もう許可とったよ。

それに本人も

ハッスル・ポツチャマを
この小説で見

て『30%ぐらい俺だから
問題ないと思う。』

って、言っ

てくれたんだよ。

それに今日は

ちゃんと話してきて

昔の事も言っ

て、言ってくれたし」

ハッスル・ポツチャマ

「昔の事？」

バンダナ・ピカチュン

「まあ、

それはさて置き

前回の話の続きを
しましょうか。」

ハッスル・ポツチャマ

「ああ、確か俺が
薫と絢辻さんの話が
手抜きだろって
お前に言った話か？」

バンダナ・ピカチュン

「その話の次の
好きなキャラクターに
ついてです。」

ハッスル・ポツチャマ

「ああ、あの話か。」

バンダナ・ピカチュン

「まずはキミキスの
キャラクターについて
語りましょうか？」

ハッスル・ポツチャマ

「だな。」

まずはピカチュン、

お前の好きな

ヒロインの話から

聞いていくか。」

バンダナ・ピカチュン

「了解（へ、▽、ゞ）」バンダナ・ピカチュン

「まずは

メインヒロインの

星乃結美さんから。」

ハッスル・ポツチャマ

「お前の大好きな

大人しい人だな。」

バンダナ・ピカチュン

「それに図書委員と

ロングヘアーと

胸が小さい事によって

作者の理想の女性が
現実になったかのような
素晴らしいヒロインに
なっているんだよ。」

ハッスル・ポツチャマ

「貧乳好きで
髪が長い人が好みの
お前にとっては
最強のヒロインだな。」

バンダナ・ピカチュン

「一番は性格ですよ！」

ハッスル・ポツチャマ

「リアルと言う名の
クソゲーには
絶対に存在する事のない
あの素晴らしい性格は
俺も好きだ。」

バンダナ・ピカチュン

「とりあえず
星乃さんとは
結婚したいですね。」

ハッスル・ポツチャマ

「で、そんなお前は
スキルートか
ナカヨシルート
どっちが好きなんだ？」

バンダナ・ピカチュン

「スキルートですね。
僕はキミキスでは
だいたい
スキルートの方が
好きです。」

ハッスル・ポツチャマ

「そうか、俺は
仲良しルートの方が
好きだけだな。」

バンダナ・ピカチュン

「なんかスキの方が
初々しくて

作者は好きです。

それに星乃さんは
星乃さんのままで
いいと思います。」

ハッスル・ポッチャマ

「俺はやっぱり

星乃さんは

転校する訳だし、

あのままの性格は

本人のためにも

よくないと思うんだ。

それにナカヨシルートは

全部のキャラに

共通する事だけど

面白いし。」

バンダナ・ピカチュン

「確かに僕も

『ご主人様』ルートに

限ってはナカヨシの方が
好きですよ。

ご奉仕されるのは……」

ハッスル・ポツチャマ

「話が脱線してきたな。
星乃さんに戻すか。」

バンダナ・ピカチュン

「ですね。」ハッスル・ポツチャマ

「星乃さんって
基本的には
いい人だよな？」

バンダナ・ピカチュン

「いい人過ぎですよ！
僕の知っている
現実の女子達とは
大違いですよ！」

ハッスル・ポツチャマ

「だよな（笑）」

バンダナ・ピカチュン

「自分から掃除したり
他の人達の図書委員の
仕事の変わりに
引き受けたり……」

ハッスル・ポツチャマ

「やっぱり
メインヒロインは
このぐらい
じゃないとな。」

バンダナ・ピカチュン

「でも、アニメでは
最悪な扱いを
受けてましたよね……」

ハッスル・ポツチャマ

「摩央姉がよければ
全てよし！」

バンダナ・ピカチュン

「僕はあれを見て
今まで摩央姉が
嫌いになりましたね。」

ハッスル・ポツチャマ

「お前にとっては
スクイズよりも
最悪なアニメ
なんだよな。」

バンダナ・ピカチュン

「当たり前ですよ！
あの星乃さんを
彼女にしておきながら
摩央姉を
好きになるなんて
普通の感性を
持った人間なら絶対に
ありえませんよ！」

ハッスル・ポツチャマ

「まあ、俺だったら
どっちも彼女に

するけどな（笑）」

バンダナ・ピカチュン

「まあ、ポツチャマはゲームの中だから別にいいけど、多くのファンが見るアニメであればないですよ。」

ハッスル・ポツチャマ

「まあな。」

バンダナ・ピカチュン

「はっきり言って最低です。」

あの女神的な性格の星乃さんを

不幸にする奴は

誰であろうと

許せない……」

ハッスル・ポツチャマ

「まあ俺は別に
あの終わり方はないだ
と思っただけだな。」

バンダナ・ピカチュン

「僕の中では
絶対はない
終わり方でした……」ハッスル・ポツチャマ

「お前がそんなに
星乃さんが好きなのは
やっぱりゲームの
影響だよな？」

バンダナ・ピカチュン

「もちろんです。
お互いに最初から
好きな2人の
初々しい恋は
赤面しながら
プレイしていた
記憶があります。」

ハッスル・ポツチャマ

「そうか、お前は
中1のお宝本も
知らない時に
このゲームを
始めたんだよな？」

バンダナ・ピカチュン

「キミキスで初めて
女の子と言うものを
知りました。」

ハッスル・ポツチャマ

「まあ、現実の女とは
違うけどな。」

バンダナ・ピカチュン

「星乃さんが
転校する事を
知った時は
泣きました。」

ハッスル・ポツチャマ

「確かに俺も
あの死の宣告を
聞いた時は
悲しかったな。」

バンダナ・ピカチュン

「エンディングまで
泣きながら
プレイしましたね。
まさか転校だけで
あんなドラマが
生まれるとは……
アニメ星のカービィで
感動していた
僕にとっては
過酷すぎでした……」

ハッスル・ポツチャマ

「でもエンディングで
また号泣したんだろ？」

バンダナ・ピカチュン

「はい、いい意味で

号泣しました。

感動しすぎて

もう1回、星乃さんを
攻略したほどです。

今でも攻略します。」

ハッスル・ポツチャマ

「星乃さん

好きだな」(笑)」

バンダナ・ピカチュン

「大好きです。

大好き過ぎて

ヤンデレに

なるほどです。」

ハッスル・ポツチャマ

「おいおい……

俺はヤンデレは

苦手だぜ……」

バンダナ・ピカチュン

「冗談だよ。」

さて、次はキミキス
真のメインヒロイン
二見さんについて
熱く語りましょう。」

ハッスル・ポツチャマ

「了解した。」バンダナ・ピカチュン

「二見さんは

僕が初めて攻略した
人生初のヒロインです」

ハッスル・ポツチャマ

「二見瑛理子か。」

バンダナ・ピカチュン

「僕は二見さんが
全てのギャルゲーの中で
一番だと思います。」

ハッスル・ポツチャマ

「携帯電話の待ち受け
二見さんだよな？」

バンダナ・ピカチュン

「PSPの画面も

PS3の画面も

DSの画面も全て

二見さんです。

部屋の右壁は

二見さんのポスターで
埋め尽くされています」

ハッスル・ポツチャマ

「だからお前の部屋には
入りたくないん
だよな……

ギャルゲーの達の
ポスターばかりで
やばいからな……」

バンダナ・ピカチュン

「あ、読者の皆さん
引かないで下さいね！」

ハッスル・ポツチャマ

「俺でも引いてるのに
読者が引かないなんて
無理だと思うぞ……」

バンダナ・ピカチュン

「だよね……」

ハッスル・ポツチャマ

「さて、そんなに
二見さんが
大好きな理由は？」

バンダナ・ピカチュン

「分らないです。」

ハッスル・ポツチャマ

「はあ？」

バンダナ・ピカチュン

「僕、キミキスを

始めた当初は

星乃さんを攻略する

予定だったのですが、

初めて二見さんに

出会った時に

『あ……僕……この人を

攻略したい……』

って、思っただんです。」

ハッスル・ポツチャマ

「一目惚れって奴か。」

バンダナ・ピカチュン

「橘さんが

飼い主の所に戻る

習性があるように

作者にも二見さんを

攻略したくなる

習性があるんです。

今でも、

1ヶ月に1回以上は

二見さんを

攻略してますよ。」

ハッスル・ポツチャマ

「依存レベルだな……」バンダナ・ピカチュン

「自分でも

分かっていますが、

二見さんを

目の前にすると

どうしても

攻略したくなるのが

作者なんです。」

ハッスル・ポツチャマ

「まあ、俺も二見さんは
好きだけどな。

年上を思わせるような

あの声と仕草は

最高だぜ。」

バンダナ・ピカチュン

「二見さんのいい所は
いっぱいありすぎて

紹介するのが

難しいですね……」

ハッスル・ポツチャマ

「せっかくだから
時間の許す限り
書いてみたらどうだ？」

バンダナ・ピカチュン

「そうですね。

それでは、二見さんの
いい所を

紹介したいと思います」

ハッスル・ポツチャマ

「ああ。」

バンダナ・ピカチュン

「まずは見た目ですね。
見た目と言っても
髪型とか体型とか
あると思いますが、
まずは第1印象ですね」

ハッスル・ポツチャマ

「お前の就職活動でも
大事な1つだな。」

バンダナ・ピカチュン

「あの紙飛行機と
夕焼け空と

二見さんが

なんとも言えない

魅力を出していました」

ハッスル・ポツチャマ

「俺もあの立ち絵には
瞬殺されたからな。」

バンダナ・ピカチュン

「初めて見た時、
作者の心臓は

バクバクいってました。

リアルで恋のした事がない
作者が初めて

恋した瞬間でした。」

ハッスル・ポツチャマ

「確かに二見さん
綺麗だからな。」

バンダナ・ピカチュン

「そして2つ目は
総合的な見た目です。
あの細い感じが
見事に作者の
好みでした。」

ハッスル・ポツチャマ

「スレンダーな人が
お前の好みだからな。」

バンダナ・ピカチュン

「胸なんて
なくたって

いいんだよ！」バンダナ・ピカチュン

「3つ目は髪型です。」

ハッスル・ポツチャマ

「お前の大好きな
黒髪ストレートだな。」

バンダナ・ピカチュン

「二次元のキャラで
長髪のヒロイン……
特に黒髪ストレートは
ピカチュンキラー
ですよ。
ただし、
ツンデレは除く！」

ハッスル・ポツチャマ

「……………」

バンダナ・ピカチュン

「4つ目は声ですね。」

ハッスル・ポツチャマ

「声優さんか。」

バンダナ・ピカチュン

「聞いただけで
もう作者は

ゾクゾクしていました。
今でもゾクツときます」

ハッスル・ポツチャマ

「ピカチュン……
お前は二見さんを
愛し過ぎだ……」

バンダナ・ピカチュン

「5つ目は

クールな所です。

ツンデレやクーデレが

そんなに好きじゃない

作者なのですが、

二見さんのクールさは

何故か嬉しいと言うか

心地いいと言うか……

まあ、それは

おいといて、
6つ目は仕草です。」

ハッスル・ポツチャマ

「二見さんの仕草は
俺も好きだぜ。」

バンダナ・ピカチュン

「そう言えば、
結構雑談したよね……」

ハッスル・ポツチャマ

「そうだな。
それじゃあ最後に
いい所をあと1つ言って
終わりにするか？」

バンダナ・ピカチュン

「そうですね。」バンダナ・ピカチュン

「7つ目はデレた時の
異常な可愛さです。」

ハッスル・ポツチャマ

「二見さんのデレは最強だからな。」

バンダナ・ピカチュン

「もう7、8ページは書いたかな？」

ハッスル・ポツチャマ

「なあ、1ついいか？」

バンダナ・ピカチュン

「何？」

ハッスル・ポツチャマ

「この小説ってPCで見てる人は見づらいのか？」

バンダナ・ピカチュン

「作者には

分からないですね。

作者は自宅に

PCがないので。」

ハッスル・ポツチャマ

「携帯電話向けの

小説って事だよな？」

バンダナ・ピカチュン

「ずばりそうですね。」

ハッスル・ポツチャマ

「まあ、

携帯電話だからこそ

授業中に机の下で

執筆活動が

できるんだよな？」

バンダナ・ピカチュン

「そうですね。

作者にとって

就職活動よりも

執筆活動の方が

大事ですからね。

たまにネタが

浮かばなくて

スランプ状態になる事も

ありますが……」

ハッスル・ポツチャマ

「その話もまた

今度でいいだろ。」

バンダナ・ピカチュン

「そうですね。

それでは、次回は

残りのヒロイン達と

アマガミヒロインの

話をしたいと思います。

それでは、皆さん

また今度お会い

しましょう。

では。」

バンダナ・ピカチュンハッスル・ポツチャマの雑談コーナー1前編（後書き）

次回は本編を書きます。

あと、また雑談を

書く時には

時間をしっかりかけて

20ページぐらい

書きたいと思います。

第20話：綾辻つかさ・放課後デート1（前書き）

20話〜23話までは

スランプ状態の中

書いたものなので

面白くないかも

しません……

第20話：綾辻つかさ・放課後デート1

●図書室

綾辻つかさ

「はぁ……

やっと終わったね。」

橘純一

「うん、そうだね。」

図書室の受け付けは
大変だなぁ……

綾辻つかさ

「ねえ、橘君
一緒に帰ろうよ。」

橘純一

「うん、いいよ。」

綾辻つかさ

「やった！」

橘純一

「ははは」

綾辻さんは
大げさだなあ……

● 商店街

橘純一

「さて、どこ行こうか？」

綾辻つかさ

「私は橘君と一緒に
居られれば
どこでもいいよ。」

橘純一

「そっか……」

それじゃあ
まんま肉まんでも
食べながら
どこ行くか考えようか？

綾辻つかさ

「うん。」

(……………)

橘純一

「ははは、綾辻さんは
食いしん坊だなあ。」

綾辻つかさ

「せっかく

いくら食べても

太らない体に

生まれてきたんだから

たくさん食べないと

損だよ。」

橘純一

「はは、そっか。」

今の言葉、梨穂子に
聞かせてやりたいな……

そ、そう言えば

梨穂子の胸

まんま肉まんぐらい

あったよな？

あ、綾辻さんの胸も

まんま肉まん

ほどじゃないけど

けっこう……

綾辻つかさ

「橘君？」

橘純一

「まんま肉まん

……胸……」

綾辻つかさ

「橘君、私の

まんま肉まん

触ってみる？」

橘純一

「え!？」

綾辻さんの
まんま肉まんを!」

綾辻つかさ

「やっぱり

まんま肉まん2つで
いやらしい想像を
してたんだ。」

橘純一

「あ、いや……」

よ、読まれただと!?!綾辻つかさ

「私は別に橘君になら
触られても
いいんだけど……」

橘純一

「と、とりあえず
歩こうか!？」

綾辻つかさ

「あはは、そうだね。」

僕は紳士だ……
僕は紳士だ……
僕は紳士だ……
理性を保つんだ……

(ギュ……)

橘純一

「あ……」

綾辻つかさ

「いいよね?」

橘純一

「う、うん……」

綾辻さん、
いきなり僕の手を……

綾辻つかさ

「……………」

橘純一

「……………」

て、照れるな……

綾辻つかさ

「あ、あの……」

橘純一

「な、何かな？」

綾辻つかさ

「デパートに行かない？」

橘純一

「何か買いたい物でもあるの？」

綾辻つかさ

「ううん、何となく。」

橘純一

「ははは、いいよ。」

●デパート

綾辻つかさ

「すごい……

白になったり

黒になったりする

お面だって……」

橘純一

「何に使うんだろ？」

綾辻つかさ

「うーん、分からない。

でも、お面を

使わなくても

白になったり

黒になったり

する人も居るよね？」

橘純一

「そ、そうだね……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「私とかね……」

橘純一

「絢辻さんだな……」

（……………）

橘純一

「あ、新しい
メタギアだ！」

綾辻つかさ

「これは買わないとね」

(……………)

橘純一

「うーん、

『モテる紳士の本』
か……

僕も買おうかな？」

綾辻つかさ

「だ、駄目だよ！」

橘純一

「どうして？」

綾辻つかさ

「橘君がこれ以上
かっこよくなったら
私……」

橘純一

「私？」

綾辻つかさ

「と、とにかく

橘君は充分

かっこいいから

大丈夫だよ！」

橘純一

「う、うん……」 ● 帰り道

綾辻つかさ

「橘君、今日は

お宝本買わなかったね」

橘純一

「あ、当たり前だよ！」

あ、いや、僕は
お宝本なんて……」

綾辻つかさ

「お宝本って
いう言葉が出てる時点で
白状したのと同じだよ」

橘純一

「ううっ……」

綾辻つかさ

「わ、私じゃ……
お宝本の変わりにな
れないかな……」

橘純一

「あ、綾辻さん？
そ、それは……」

綾辻つかさ

「私、橘君の事……」

(タッタッタ……)

後ろの方で誰かが
走っていった。

綾辻つかさ

「……………」

橘純一

「だ、誰か居た
みたいだね……」

綾辻つかさ

「う、うん……」

橘純一

「帰ろうか？」

綾辻つかさ

「うん……」

ま、まさか

森島先輩じゃないよな？

綾辻つかさ（闇辻さん）

{ふふっ……}

橘純一

「……………」

綾辻つかさ

「橘君……」

(ギュ……)

綾辻さんは
ハグしてきた。

綾辻つかさ

「じゃあね。」

橘純一

「うん……」

ぼ、僕、どうして……

本当は森島先輩だと
仲良くしたいのに……

これじゃあまるで
誠と同類じゃないか！

ポツチャマ

「神は言っている。
作者には
逆らえないと……」

第20話：綾辻つかさ・放課後デート1（後書き）

次回はかなり短いです。

第21話：桜井梨穂子・休日デート

●公園

桜井梨穂子

「純一、お待たせ。」

橘純一

「お、やっときたか。」

待ち合わせ時間より
10分遅刻か……

桜井梨穂子

「ごめんね」
遅れちゃって。」

橘純一

「別にいいよ。」

女の子が遅れてくるのは
当たり前的事だからな。

橘純一

「それじゃあ行くか。」

桜井梨穂子

「うん。」

● 商店街

桜井梨穂子

「このクレープ屋さん
美味しいんだよ。」

橘純一

「そうなのか。
それじゃあ
クレープを買うか。」

桜井梨穂子

「うん。」

(……………)

僕はやたらと
名前が長い
クレープを1つ買って
梨穂子と食べていた。

橘純一

「確かに美味しいな。」

桜井梨穂子

「美味しいけど……
恥ずかしいよ。」

橘純一

「確かにな。」

そう言う梨穂子も
まんざらでもない
みたいだな。

橘純一

「あ……」

桜井梨穂子

「……………」

梨穂子の口元に
クレープが……

(ひょい……)

桜井梨穂子

「え？」

(パク……)

桜井梨穂子

「あ……」

橘純一

「甘いな。」

桜井梨穂子

「は、恥ずかしいよ……」

橘純一

「ははは……」

や、やったこっちも
恥ずかしく
なってきたぞ……

こんな感じで
梨穂子とデートした。

まあ、少しずつ
前進すればいいか……

第22話：森島はるか・3度目の告白

●屋上

橘純一

「あ、森島先輩！」

森島はるか

「橘君？」

橘純一

「やっと先輩の事を見つけれました。」

森島はるか

「『やっと』って
もしかして、ずっと
私の事を探してたの？」

橘純一

「はい。」

森島はるか

「それで今日は
行き違いに
なったのね。」

橘純一

「森島先輩、
今日は一緒に
帰りませんか？」

森島はるか

「うん、いいよ。」

橘純一

「やった！」

よし、今日は森島先輩と
帰る約束をしたぞ！

●商店街（放課後）

橘純一

「今日は先輩に
紹介したいお店が
あるんです。」

森島はるか

「いったい
どんなお店？」

橘純一

「着いてからの
お楽しみです。」

森島はるか

「きっと橘君の事だから
すごいお店ね。」

橘純一

「ははは……」

あんまりハードルを
上げられてもな……

● ??????

橘純一

「ここです。」

森島はるか

「わお！」

僕は森島先輩を
ぬいぐるみの
専門店に連れて来た。

森島はるか

「すごいたくさんね。」

橘純一

「そうですね。」

森島先輩、

目をキラキラさせて

ぬいぐるみを

見てる……

連れて来て

良かったな……

森島はるか

「あ、あのワンちゃん

橘君にそっくり！」

橘純一

「そ、そうですね……」

ま、まあ、

喜んでるからいいか……森島はるか

「あのクマさん

可愛い！」

橘純一

「クマ吉君人形ですか…

森島先輩！

そいつは危険です！

橘純一

「え、ええと……

あ、あの大きなクマの
ぬいぐるみもけっこう
可愛いですよ。」

森島はるか

「あ、本当だ！」

よ、よし！

クマ吉君人形から

森島先輩を
救ったぞ！

クマ吉君人形

「チッ……………」

こうして、森島先輩と
ぬいぐるみのお店で
楽しく過ごした。

そして、外に出た時……

橘純一

「先輩、ちょっと
トイレに行ってきて
いいですか？」

森島はるか

「うん、いいよ。」

よし、計画通りだ。

僕は店に戻って
ぬいぐるみを
買う事にした。

店のおじさん

「おや、
何か忘れ物かい？」

橘純一

「あ、あの……
あの大きなクマの
ぬいぐるみを下さい。」

店のおじさん

「プレゼント用の
箱に入れておくよ。」

橘純一

「あ、ありがとう
ございます。」

店のおじさんには
分かったみたいだな……

橘純一

「あとついでに
クマ吉君人形も下さい。
包装なしで。」

店のおじさん

「はいよ。」

僕はぬいぐるみを買って
外に戻った。

ワル男

「姉ちゃんY O I
お1人さんかい？
俺と一緒に
遊ばないかY O I？」

森島はるか

「あ、ちよつと！
離して下さい！」

あっ！

森島先輩が誰かに
襲われているぞ……

た、助けないと……橘純一

「は、はるか、
待ったか？」

森島はるか

「あ、橘君……」

ワル男

「お前はいつたい
誰だY O ー？」

橘純一

「僕のはるかの彼氏だ！
僕のはるかに
近づくな！」

森島はるか

「え……」

ワル男

「お前がこの姉ちゃんの
彼氏だって？
全然釣り合っ
てないY O ー！」

橘純一

「……………」

た、確かにそうだ……

僕は森島先輩と

全然釣り合っていない……

ワル男

「男なら拳と拳で
勝負だY O ー！」

橘純一

「くっ………」

喧嘩じゃ絶対
勝てないよ……

せ、せめて

森島先輩が逃げる時間を
稼がないと……

クマ吉君人形

（空気読めよ……）

ワル男

「Y O ー？」

クマ吉君人形

（ここは紳士として
空気を読まないと
大変な事になるよ……）

ワル男

（どう言う事だY O ー？）

クマ吉君人形

（作者は適当に

話を書いているんだ。

この流れで君が勝ったら

おそらくこの話は

君ごと消されるよ……」

ワル男

「……………」

橘純一

「も、森島先輩

僕が時間を稼ぐので

逃げて下さい！」

森島はるか

「で、でも……」

ワル男

「失礼しました

紳士ボーイ！」

橘純一

「え……」

ワル男

「やっぱりモブキャラは主人公には勝てません！とりあえず空気を読んで帰りますY O ー！だから、ミーの事をまた登場させてY O ー」

（タッタッタッタッ！）

橘純一

「な、何だったんだ今の奴は……」橘純一

「森島先輩、大丈夫でしたか！？」

森島はるか

「う、うん……」

橘純一

「よかった……」

森島はるか

「橘君は大丈夫？」

橘純一

「は、はい。」

ちよつと

びっくりしましたが
大丈夫でした。」

森島はるか

「橘君、私の事
はるかって……」

橘純一

「あ、いや、

いきよいでつい……
すいません。」

森島はるか

「ううん、
私は別に……」

橘純一

「すみません、
僕が森島先輩から
離れたばかりに……」

森島先輩

「あ、その箱……」

橘純一

「あ、はい。
さっきのぬいぐるみを
買ってきたんです。」

森島はるか

「橘君……」

（タッタッタッタ……）

橘純一&森島はるか

「！」

い、今だれかが……

橘純一

「あ！」

森島はるか

「どうしたの？」

橘純一

「美也に買った
クマ吉君人形がない！」

森島はるか

「み、美也って誰？」

橘純一

「僕の妹です。」

森島はるか

「な、なんだ、
妹さんか……」

橘純一

「おかしな……
店の外には持ってきた
はずなのに……」

森島はるか

「もしかして

さっきの足音が

クマ吉君人形じゃない？

橘純一

「ま、まさか……」

森島はるか

「追いかけてみるわよ！

橘純一

「あ、森島先輩！」

さっきの足音は

誰だったんだろう？

って、そんな事より

森島先輩を

追いかけないと……

橘純一

「せんぱい！
待って下さい！」 ●公園

森島はるか

「うーん、確かに
こっちの方に誰かが
来たんだけどなあ……」

橘純一

「き、きつと
仲間達のところに
戻ったんですよ。
1人だと寂しいから……」

森島はるか

「あ、そっか
そうよね。」

クマ吉君人形、
本当はどこに
行ったんだろう？

森島はるか

「あ、あのさ橘君……」

橘純一

「はい。」

森島はるか

「その……ありがとね」

橘純一

「い、いいんですよ！
僕はただ、森島先輩を
助けたかった
だけですから。」

森島はるか

「さっきの橘君
かつこよかったよ……」

橘純一

「え？」

森島はるか

「あんな怖い人に
1人で立ち向かって
本当にすごいよ。」

橘純一

「そ、それほどでは……」

森島はるか

「それに、私の事
『はるか』って
呼んでくれた時
ドキッと
しちゃったな……」

橘純一

「も、森島先輩……」

森島はるか

「……………」

い、いい雰囲気
じゃないのか？

橘純一

「森島先輩

……好きです……」

森島はるか

「……………」

橘純一

「……………」

森島はるか

「……………橘君、
ずるいぞ！」

橘純一

「え？」

森島はるか

「い、今
そう言われたら
断れないじゃない……」

橘純一

「じ、じゃあ！」

森島はるか

「うん、私も橘君の事が

大好き。

『はるか』って

呼ばれたい……」

や、やったぞ！

ついに森島先輩に

OKしてもらえたぞ！

で、でも……これは夢じゃないのか？

人形が突然消えたり、

悪そうな人があっさりと

退散したり……

い、いや、夢なら

覚める前に……

橘純一

「森島先輩……
いや、はるか。
目をつぶって。」

森島はるか

「うん……」

(……………)

これは覚める事のない
現実だった。

僕、森島先輩と……

森島はるか

「橘君……」

橘純一

「は、はい……」

森島はるか

「もう、橘君は
私の彼氏なんだから
敬語使っちゃ
駄目でしょう？」

橘純一

「わ、分かったよ
はるか……」

森島はるか

「……………」

橘純一

「き、今日はもう
帰ろうか……」

森島はるか

「うん……」

こうして僕は

森島先輩と

恋人同士になった。

僕はもう森島先輩……

いや、はるか以外の

女の子とは絶対に

いい感じにならないぞ！

だって僕ははるかのかの
彼氏なんだから。

第23話：詞&薫編・2人の想い……

●夢の中

橘純一

「……………」

ピカチュン

「やあ。」

橘純一

「君がいろいろと
手を引いてるんだね……」

ピカチュン

「うん、そうだよ。
何故なら、

制作者・スタッフ
プレイヤーは
この僕だからね。」

橘純一

「ぼ、僕は森島先輩と
仲良くしたいのに……」

ピカチュン

「僕は森島先輩より
梨穂ちゃんと
綾辻さんの方が
好きなんだよ。」

橘純一

「だ、だからって……」

ピカチュン

「僕はね、
君にしか救えない人が
居る事を知っている。」

橘純一

「ぼ、僕には
関係ないだろ……」

ピカチュン

「仕方ないな……
よし、君が夢から
覚めたら
浮気する事が
とても楽しく感じる
人間になるように
設定しておくか……」

橘純一

「設定って……
神様じゃないんだから
そんな事できる訳
ないだろ！」

ポツチャマ

「作者は言っている……
この小説の神は
作者だと……」

橘純一

「……………」

ピカチュン

「洗脳開始！」

●橘純一の部屋

橘純一

「……………」

そうだな、

紳士として
女の子にま均等に
優しくしないと
駄目だよな。

よし、今日から

みんなとできるだけ

仲良くするぞ！●棚町家のお風呂

正直言って悔しい。

でも、仕方ない事かも
しれない。

純一はいつのまにか
一人で歩き始めてて……

棚町薫

「あたしは
置いてきぼり……か」

勝手だよ……ホント。
勘弁してほしいわ。

……………。

もっと早く
気づいていれば
よかったの？

棚町薫

「あ……っ、もう！
納得いなくても
納得しなきゃダメ！」

あたしと居る時より、
森島先輩と一緒にの方が
ずっといい顔で
笑ってるんだから……

反則だよ、純一。
あんな顔されたら
諦めるしか
ないじゃない！

……………。

「…………でも、
側に居るくらいなら
いいよね。」

友達としてなら……
誰よりも上手く
付き合える。

その自信はある。

ずっとこんな
感じだったんだから

……あたしたち。

でも、まだ諦めた
訳じゃない。

悪あがきがあたしの
性分なんだし。

覚悟してなさいよ！
いつかきつと……

● 絢辻詞の部屋

誰にも期待しない。
自分でそう決めた

はずでしょ……

だから……諦めればいい

それなら友達として
上手にやっていけるはず

仲良くしたっていいの。
友達だから。

後は……わたしの
心ひとつ……

苦しくたって仕方ない。
辛くたって仕方ない。

橘君には、
お似合いの人が

いる事……

ちゃんと

受け止めなければ
いけない。

わたしはわたし。

何もかも

手に入れようなんて、

おごがましいにも
ほどがある。

それでも……。

ねえ、橘君、

わたしの心……痛いよ。

もう一歩だけでいいの。

私を助けて下さい。
あたしを助けて下さい。

そうしたらきっと……
上手く笑えるから。

第23話：詞&薫編・2人の想い……（後書き）

はあ……

スランプ状態で

アイディアやネタが

浮かばないです……

いつもは

スランプ状態になっても

ぐっすりと寝れば

ネタが浮かんで

くるのですが……

今日は駄目でした。

ネタが浮かぶまで

しばらく休みます。

とりあえず

新しいネタが

見つかるまでは

キミキスをやっています。

二見さん、今行くよ！

第24話：紳士の日常

●通学路

桜井梨穂子

「あ、おはよー」

橘純一

「おお、梨穂子か。
せっかくだから一緒に
学校行くか？」

桜井梨穂子

「そうだねー」

梨穂子と一緒に居ると
癒されるなあ……

●教室

(ボコッ！)

橘純一

「ぎゃあああ！」

梅原正吉

「いつもの夫婦漫才か？」

橘純一

「違うよ！」

棚町薫

「こんな感じで
相方の調子が
悪くてね……」

梅原正吉

「棚町、お前も
大変だな……」

棚町薫

「梅原君は
分かってくれるの？」

また始まったよ……

まあ、一緒に居て
楽しいから
別にいいけどね。

● 屋上

絢辻詞（黒）

「ねえ、橘君……」

橘純一

「どうしたの？」

絢辻詞（黒）

「あなたはどうして
他人に優しいの？」

橘純一

「うーん……」

絢辻詞（黒）

「もしかして
過去に何かあったの？」

橘純一

「……………別に。」

絢辻詞（黒）

「怪しいわね……………」

まあ、もう
克服したけどね。

今ではクリスマスが
待ちきれないほどに
なってるよ。

● 3年教室

橘純一

（は、はるか……）

森島はるか

「あ、橘君！」

だ、男子達が
注目してる……

橘純一

（廊下で話さない？）

森島はるか

「うん。」 ● 3年廊下

橘純一

「あ、あの……
学校に居る時は
恋人同士って事は
みんなには秘密にして
もらえませんか？」

森島はるか

「大丈夫。
誰にも言わないから。」

橘純一

「よかった……」

森島はるか

「で、でも……」

橘純一

「はい？」

森島はるか

「2人っきりの時は
敬語はなしだからね。」

橘純一

「うん、分かったよ。」

森島先輩に

敬語を使わなくても
いい男子は僕だけ
だよな？

僕は本当に

幸せ者だなあ……

●図書室（放課後）

綾辻つかさ

「本の整理って
本当に大変だね。」

橘純一

「うん、そうだね。」

綾辻つかさ

「でも、橘君と一緒になら
どんなに大変な作業でも
私は大丈夫だよ。」

橘純一

「ははは、僕もだよ。」

綾辻つかさ

「え……」

橘純一

「僕も綾辻さんと
一緒なら

どんなに大変な作業でも
苦じゃないよ。」

綾辻つかさ

「橘君……」

橘純一

「綾辻さん……」

これが僕の1日だ。

薫と一緒に笑い

綾辻さんと

刺激的な事をして

絢辻さんに罵られて

梨穂子に

癒やしてもらい

そして、最後には

はるかかの所に帰る。

これが今の生活だ。

僕、幸せだなあ……

第25話：黒辻&闇辻・裏表のない素敵なお人、VSチートなヤンデレ（前書き）

またまた1日の
最高アクセス数が
更新されました。

2011/06/12
1444アクセス

これからも
ごひいき下さい。

第25話：黒辻&闇辻・裏表のない素敵な人、VSチートなヤンデレ

●公園

蒔原美佳

〔花園君、

まだかなあ……〕

ピカチュン

（作者が毛嫌いしている

蒔原美佳さんは

また花園聖治と

デートの約束を

していたのだった。）

絢辻詞（白）

「あの……あなた
蒔原さんよね？」

蒔原美佳

「うん、そうだけど。」

絢辻詞（白）

「ちょっと

聞きたい事があるんだけど、
いいかな？」

蒔原美佳

「うん、彼氏が来るまで
なら別にいいよ。」

絢辻詞（白）

「それじゃあ
手短に聞くな。」

（……………）

蒔原美佳

「う、嘘ついて
すいませんでした……」

絢辻詞（白）

「ううん、
別に構わないわよ。
ただ、最後に1つ
いいかな？」

蒔原美佳

「な、何でしょう……」

絢辻詞（黒）

「あなたみたいな
卑しい人間なんか
幸せになる
権利なんて無いわ。」

もし、あなたが
幸せになった時は
あたしが壊して
あげるから
覚悟してなさい。」

蒔原美佳

「……………」

蒔原美佳が
BADルートに
突入しました。

蒔原美佳から

興味深い話を聞いたわ。
行動に一貫性がない、
読みづらい性格とは
思っていたけど……

クリスマスに
あんな出来事が
あったからなのね……

だからなのかな……

不思議と、橘君が
気になるのは……

絢辻詞

「……………」

……………

まあ、いいわ
……………そろそろ帰ろう。

あと、もう1つ

面白い話が

聞けたけど……

その事は後で考えれば
いっか……●昇降口

橘純一

「それじゃあ
放課後、図書室で。」

綾辻つかさ

「うん！」

やっぱり橘君と
一緒にいる時が一番
楽しいなあ……

もう幸せ過ぎて……

絢辻詞（白）

「綾辻さん、
ちよっといいかな？」

綾辻つかさ

「あ……絢辻さん。
うん、いいよ！」

絢辻詞（白）

「ちよつとここでは
話しづらい事だから
場所を変えても
いいかな？」

綾辻つかさ

「うん。」

●屋上

綾辻つかさ

「私、絢辻さんとは
1 回話して

みたかったんだ。

同じ名前の人なんて
めったに居ないでしょ？

絢辻詞（白）

「ええ、そうね。」

綾辻つかさ

「でも、忙しい人だから
声をかけたら

悪いかなあ……

って、思ってたら

まさか絢辻さんから

声をかけて

くれるんだもん！

本当に感激。」

絢辻詞（白）

「ふふっ、大げさね。」

綾辻つかさ

「あ、ごめん。
話があるんだよね？
私に話せる事なら
何でも話すよ！」

絢辻詞（白）

「それじゃあ
早速聞くわよ。」

綾辻つかさ

「うん。」

絢辻さんは間をとって
本題に入った。

絢辻詞（黒）

「あなたが何で
橘君と一緒に居るの？」

綾辻つかさ

「あ、そうそう

私が図書委員の集まりに
遅れて行ったら偶然

橘君が1人

一緒に仕事する人が
居なくてね、

それで一緒に
図書委員の仕事を
する事にしたの。

私も最初は

びっくりで……」

絢辻詞（黒）

「そのぐらいの事は
知ってるわ。」

綾辻つかさ

「え？」 絢辻詞（黒）

「あたしが
聞いているのは、
そんな意味じゃないの」

綾辻つかさ

「それじゃあ
どんな意味？」

絢辻詞（黒）

「あくまでも
言わないつもりね……」

綾辻つかさ

「うーん、絢辻さんの
言い方は難しくて
よく分からないよ……」

絢辻詞（黒）

「あたしが

言っているのは

どうして橘君に

あんな事をした

あなたが橘君と

仲良くしてるかって話」

綾辻つかさ

「あんな事？

それってキスの事？」

絢辻詞（黒）

「蒔原さんから

全部聞いたわよ。」

綾辻つかさ

「聞いたって、何を？」

（……………）

絢辻詞（黒）

「あたしの
言っている意味が
分かったかしら？」

綾辻つかさ

「そっか……美佳ちゃん
全部、言っちゃったんだ
簡単には口をわらないと
思ったんだけどなあ……」

絢辻詞（黒）

「私にとっては
簡単だったわよ。」

綾辻つかさ

「そっか……バレても
夏休み後だと
思ってたんだけど、

絢辻さん相手じゃ
隠しきれないか……」

絢辻詞（黒）

「あなたなんかが
橘君と一緒になる
権利なんて無いわ。」

綾辻つかさ

「あはは……
あはははは！」

絢辻詞（黒）

「！」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ふふっ、ごめんなさい
いきなり笑って。
ただ、あなたが
あまりにも
おかしい事を言うから
笑っちゃった。」

絢辻詞（黒）

「やっぱり

猫かぶってたわね。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「そうよ。

これが本当の私。

橘君に恋してから

生まれた本当の私。」絢辻詞（黒）

「好きって言うより
依存じゃないの？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「確かにそうね。

今の私は橘君なしでは
生きていけないわ。」

絢辻詞（黒）

「あなた、蒔原さんと
橘君を別れさせるために

橘君に酷い事
したわよね？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ふふっ、あれは
最善の策だったわ。」

絢辻詞（黒）

「どこが？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君は自分から
美佳に話かける事も
しなくなったし、

美佳も気まずくて橘君に
話しかけなくなったし、
それに……ストーカーも
上手く使えたし……

それにね、

あのクリスマスの辛い
過去を経験した橘君は
前よりもっと

素敵でかつこよく
なったのよ。

最善じゃない。」

絢辻詞（黒）

「あなた……最低ね……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ふふっ、

価値観が違うだけよ。」

絢辻詞（黒）

「橘君に嘘について
まで付き合って……
あなたは楽しいの？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ええ、毎日が
充実してるわ。」

絢辻詞（黒）

「橘君、あなたの

した事を知ったら
きっと悲しむわよ。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「確かにそうね。
真実を知れば。
でも、橘君は
真実を知る事は
できないわ……」

絢辻詞（黒）

「それはどうかしら？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「あなたは
知らないのね……」

綾辻さんは
携帯電話を取り出した。

綾辻つかさ（闇辻さん）

「小さなぬいぐるみ、
何だか分かる？」

絢辻詞（黒）

「ただのピカチュウの
ストラップじゃない。」

ピカチュン人形

（きゃは！）

絢辻詞（黒）

「な、何……」ピカチュン人形

（分かってるよね？

もし橘さんに

真実を言ったら……

君、消えるよ？）

絢辻詞（黒）

「な、何なのよ

このストラップ!？」

たった2センチしかない
ぬいぐるみなのに……

この威圧感は……

それにこの響く声……

校庭まで聞こえ……

綾辻つかさ（闇辻さん）

「どうしたの？
そんなに驚いて……」

絢辻詞（黒）

「そ、そんな
録音した声で
あたしを驚かせようと
しても無駄よ!」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「声なんて
してないわよ？」

絢辻詞（黒）

「嘘！」

橘純一

「ど、どうしたの？」

絢辻詞（黒）

「あ、橘君、
今、声したわよね？」

橘純一

「うん、絢辻さん達の
声がしたよ。」

絢辻詞（黒）

「それだけ

じゃないでしょ！
もう1つ響く声が……」

橘純一

「響く声なんか
聞いてないけど……」

絢辻詞（黒）

「……………」

ど、どうなってるの！？

綾辻つかさ

「橘君、見て。
ピカチュン人形だよ。」

橘純一

「あ、これスマブラXの
緑バンダナの

ピカチュウだよね？」

綾辻つかさ

「うん、このバンダナがポイントで……」

絢辻詞（黒）

「……………」

（……………）

橘純一

「ところでアヤ……」

絢辻さん。

何が嘘なの？」

綾辻つかさ

「絢辻さんね、
このピカチュン人形が

神様だって言うの
信じてくれないんだよ！

絢辻詞（黒）

「神様……ふふふ……」

橘純一

「？」
● 10分後

橘純一

「あ、そろそろ
教室に行かないと……」

絢辻詞（白）

「橘君、先に
教室に戻ってて。
私は綾辻さんと
話があるから。」

橘純一

「うん、分かったよ。」

綾辻つかさ

「ごめんね、せっかく
橘君が居るのに……」

橘純一

「いや、別にいいよ。
それじゃあ、
また後で。」

こうして、変態紳士は
立ち去った。

絢辻詞（黒）

「……………」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「それで、
まだ私に何か用？」

絢辻詞（黒）

「……………」

ピカチュン人形

（大丈夫だよ。

橘さんに真実を教えたり
つかさちゃんに
危害を加えなければ
僕は何もしないから。）

絢辻詞（黒）

「……………」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ねえ、帰っていい？」

絢辻詞（黒）

「あたしは
あなたみたいな人と
橘君が付き合うのは
絶対に許せない。
だって、優しい橘君と
あなたみたいな人が
付き合うなんて
おかしいわ。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「あら、そう。」

絢辻詞（黒）

「あたしは橘君が
あなたの事を
好きにならないように
するつもりよ。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「好きにすればいいわ。
ただ、馬鹿なあなたが
橘君の心を
操作できないと思うわよ

絢辻詞（黒）

「あなたよりは
頭はいいわ。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「でも、橘君についての
知識は私の方が上よ。
あなたは橘君の
全てを知らない。
橘君の事については
私の方が天才よ。」

絢辻詞（黒）

「それはどうかな？」綾辻つかさ（闇辻さん）

「……………」

絢辻詞（黒）

「……………」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ふふっ、

橘君を私から

守りたいのなら

覚悟が必要よ。

あなたにとって

一番嫌な結果になる事は
目に見えてるわ。」

絢辻詞（黒）

「そんな事、

やってみなきゃ

分からないじゃない！」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「それもそうね。

結果を見ないと

あなたが納得するはず

ないわよね。

とりあえず警告はしたわ

でも、私は知ってるの。

あなたにとって

過酷な事が

待ってるって。」

絢辻詞（黒）

「その言葉、そのまま
あなたに返すわ。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「あなたが言うど
冗談に思えないわね。」

絢辻詞（黒）

「冗談じゃないわ。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ふふっ、怖いわね。」

キーン、コーン
カーン、コーン！

綾辻つかさ

「それじゃあ
教室に戻ろうか？」

絢辻詞（白）

「ええ、そうね。」

この人と橘君は
一緒にさせないわ。

わたしが絶対に
あの人から橘君を
守ってみせる。

綾辻つかさ（闇辻さん）

ふふっ、あの子も
簡単な事で橘君と
別れるに違いないわ。
あの子が傷つく姿は
必見ね。〜

橘君、私はあなたが

私だけを見てくれる人が
来る事を信じて
待ってるからね。

どうか、橘君と女の子が
早く別れますように……

第25話：黒辻&闇辻・裏表のない素敵な人、VSチートなヤンデレ（後書き）

ハッスル・ポツチャマ

「おいおい、絢辻さん
相手が悪いだろ……
チートが相手なんて。」

バンダナ・ピカチュン

「チート以外じゃ
絢辻さんには
勝てないからね。」

ハッスル・ポツチャマ

「それにフラグが……」

バンダナ・ピカチュン

「おっと、それ以上は
ネタバレするから
駄目だよ。」

ハッスル・ポツチャマ

.....

第26話：体育祭編、のはずだった……（前書き）

全ヒロインが出ます。

第26話：体育祭編、のはずだった……

●変態紳士の家

橘美也

「にいに、大丈夫？」

橘純一

「う、うーん……」

変態紳士は
体育祭当日に
熱を出していた。

橘美也

「みゃーは
学校行くけど、
にいに1人で大丈夫？」

橘純一

「僕は大丈夫だから
美也は早く
中学校に行くんだ。
遅刻するぞ?」

橘美也

「う、うん……」

参ったな……

体育祭で森島先輩に
いい所を見せるために
無理し過ぎたのが
駄目だったか……

本当に体がダルい……

気持ち悪い……

でも、誰も居ないから
自分1人で
いろいろしないとな……

（ピンポーン）

橘純一

「はーい……」

僕はフラフラしながら
玄関に行って
扉を開けた。

（ガチャ）

綾辻つかさ

「橘君、大丈夫？」

橘純一

「綾辻さん、
どうしたの？」

綾辻つかさ

「今日は橘君と
一緒に学校に
行こうかな？
と思って

橘君の家に来てみたら
妹さんが

浮かない顔して
出てきたから

事情を聞いたの。

橘君、熱が
あるんだね……」

橘純一

「うん……」

(フラ…………)

綾辻つかさ

「橘君！」

(ギュ…………)

倒れそうになった所を
綾辻さんに
支えてもらった。

綾辻つかさ

「橘君、眠っていた方が
いいと思うよ。
とりあえず
ベッドに行こう。」

橘純一

「うん……」

僕は綾辻さんに
支えられながら
自分の部屋に戻って
寝る事にした。

女の子に支えられる
なんて……

かっこ悪いよな、僕。●お昼ごろ

橘純一

「う、うーん……」

綾辻つかさ

「あ、橘君、起きた？」

橘純一

「うん……」

綾辻つかさ

「お水欲しい？」

橘純一

「それじゃあ
貰おうかな……」

綾辻つかさ

「うん、ちょっと
待っててね。」

綾辻さんは
水を取りに行った。

橘純一

「……………」

僕の額には
濡らしたタオルが
置かれていた。

この冷たさは
取り替えたばかりかな？

そっか……綾辻さん

ずっと僕の看病を……

って、待てよ？

綾辻さん、学校は
どうしたんだろう？

綾辻つかさ

「橘君、お待たせ。
はい、お水だよ。」

橘純一

「あ、ありがとう。
ところで綾辻さん、
学校はどうしたの？」

綾辻つかさ

「サボりだよ。」

橘純一

「さ、サボりって……」

綾辻つかさ

「そんな事より
お粥食べる？」

橘純一

「い、いや、

食べたくない……」

綾辻つかさ

「せめて一口ぐらいは何か食べないと……」

橘純一

「そうだなあ……」

あ、そうだ。

美也のプリンが
冷蔵庫にあったはず……

綾辻つかさ

「それなら食べられる？」

橘純一

「ちよつとぐらいなら
食べられると思う。」

綾辻つかさ

「それじゃあ
持ってくるね。」

橘純一

「うん……」

体育祭の日に熱を出して
可愛い女の子に
看病されてるとか
幸せ過ぎるだろ……●午後

綾辻つかさ

「……………」

橘純一

「……………」

それから綾辻さんは
僕の頭にのっている

タオルを交換したり
僕の額の汗を
拭いてくれたりした。

橘純一

「綾辻さん、ごめんね。
僕のせいで学校を
サボる事になって……」

綾辻つかさ

「あはは、別にいいよ。
もともと体育祭なんて
興味なかったし。」

橘純一

「ははは……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君の看病している
方が私にとって
幸せだし……」

橘純一

「え？」

綾辻つかさ

「い、今のは
聞き流して！」

橘純一

「う、うん……」

(ピンポン)

綾辻つかさ

「あ……」

橘純一

「美也かな？」

綾辻つかさ

「ちょっと

行ってみるね。」

橘純一

「うん。」

綾辻さんは玄関に行った

ま、待てよ！

も、もしも

森島先輩だったら

綾辻さんが

玄関から出てきたら

大変な事になるかも

しれないぞ……

(……………)

桜井梨穂子

「純一、大丈夫？」

橘純一

「あ、梨穂子か。」

綾辻つかさ

「それじゃあ
私は帰るね。」

桜井梨穂子

「え、さっき来た
ばかりなのに？」

橘純一

{え……}

綾辻つかさ

「私はただ友達から
メール貰って
橘君が休んでる
って、聞いて
ゲーセン帰りに
寄ってみただけだから」

橘純一

「う、うん、
そうなんだよ！」

桜井梨穂子

「そっか。」

綾辻つかさ

「それじゃあね。」

橘純一

「うん。」

よかった……

もし、森島先輩だったら
この不自然なやりとりで
怪しんでいたかも知
しれなかったからな。

来たのが梨穂子で
よかったよ。桜井梨穂子

「純一、大丈夫？」

橘純一

「まあ、
午前中に比べれば
マシになったかな。」

桜井梨穂子

「そっか。」

橘純一

「心配して
来てくれたのか？」

桜井梨穂子

「それはそうだよ
だって……」

橘純一

「だって？」

桜井梨穂子

「私、純一の……
彼女だし……」

橘純一

「そ、そうだな……」

桜井梨穂子

「もしかして
今日はおばさん
居なかったの？」

橘純一

「ああ、だから午前中は
ずっと1人だったな。」

桜井梨穂子

「うーん、学校サボって
純一の側に居た方が
よかったかな？」

橘純一

「ははは……」

まあ、実際に
そう言う人が
居たからな……

こうして、梨穂子に
看病される事になった。

やっぱり梨穂子と
居る方が
気楽でいいな……

橘美也

「ただいまー！」

橘純一

「おかえり。」

桜井梨穂子

「あ、美也ちゃん
おかえりー」

橘美也

「あ、なーんだ

心配して帰ってきたけど
梨穂ちゃんが居るなら
安心だね。

そう言う訳で
友達の所に遊びに
行きまーす。」

橘純一

「ああ。」

美也、もうちょっと
心配しても
いいんじゃないのか？

桜井梨穂子

「今日の体育祭は
本当にすごかったよ。
塚原先輩の
バームクーヘン投げ
測定不能だったんだよ」

橘純一

「バームクーヘン投げ？

僕はしばらく梨穂子から
バームクーヘン投げの
話を聞いた。

来年の体育祭では
是非とも見たい
種目だな……（ピンポーン）

桜井梨穂子

「はーい！」

今度は誰が
来たんだろう？

棚町薫

「純一。」

橘純一

「なんだ、薫か……」

棚町薫

「その言い方は
ないでしょ？」

せっかく来てやったのに

橘純一

「はは、冗談だよ。

ああ、薫様、あなたは
女神に見える……」

棚町薫

「純一……あたしが
女神に見えるって事は
そろそろお迎えが
来るのね……」

橘純一

「ああ……薫、
僕の葬式には
絶対来てくれよな……
ガクッ……」

桜井梨穂子

「あはは……」

まさか薫が来るとはな…

こうして僕は
薫と梨穂子と雑談を
する事になった。

どうやら高橋先生は僕が
ズル休みしたと
思っているらしい。

はあ……

本当は体育祭で活躍した
かったんだけどなあ……

(ピンポン)

桜井梨穂子

「行ってくるね。」

橘純一

「ああ。」

梨穂子は
また玄関に行った。

棚町薫

「あんたさ、桜井さんと仲いいの？」

橘純一

「どうして？」

棚町薫

「だってさ、看病して貰ったんでしょ？」

橘純一

「梨穂子は幼なじみだし近所だから来てくれただけだよ。」

絢辻詞（白）

「橘君、こんにちは。」

橘純一

「あ、絢辻さん！」

棚町薫

「どうして絢辻さんがここに居るのよ？」

絢辻詞（白）

「棚町こそ

どうしてここに居るの？」

棚町薫

「あ、あたしはこいつの友達だし……」

絢辻詞（白）

「ふーん……」

橘純一

「絢辻さんはどうして？ 絢辻詞（白）

「私は高橋先生から
プリントを橘君に
渡すように
言われたから来たの。」

棚町薫

「普通は桜井さんか私に
言うはずでしょ？」

絢辻詞（白）

「だって桜井さんは
急いで帰っちゃうし、
棚町さんは先生から
声をかけられた時
逃げちゃったでしょ？」

棚町薫

「あ、あれは
プリントの事だったの？」

絢辻詞（白）

「やましい事があるから

逃げたんでしょ？」

棚町薫

「ううっ……」

橘純一

「ははは！」

桜井梨穂子

「絢辻さん、ごめんね」

絢辻詞（白）

「ううん、気にしないで
ついでに橘君が
本当に調子悪いか
見に来られた事だし。」

橘純一

「それも高橋先生から
頼まれたのかな？」

絢辻詞（白）

「ふふっ。」

橘純一

「ははは……」

それは個人的にか。

棚町薫

「あんた、どんだけ信用ないの……」

橘純一

「そうだな……
少なくとも薫よりは
信用されてると
思うぞ。」

棚町薫

「絢辻さん、純一は
ここまで頭が
おかしくなって……」

橘純一

「それって
どういう意味だよ！」

絢辻詞（白）

「そう……橘君、
ついにそこまで……」

橘純一

「あ、絢辻さんまで……」

桜井梨穂子

「あはは……」

くそ、薰め……

絢辻さんを

味方につけられたら

絶対に勝てる訳

ないだろ……

こうして、

2人にからかわれた。

後で梨穂子に癒やして

貰わないとな……●5分後

絢辻詞（白）

「長居したら

橘君に悪いから

そろそろ帰るね。」

橘純一

「え？遠慮しなくてもいいのに……」

棚町薫

「絢辻さんはね、
遠まわしに
あんたに構ってる
暇はないって
言ってるのよ。」

橘純一

「それは絶対にない。」

絢辻詞（白）

「ふふっ、意外と
そうかもしれないな。」

橘純一

「ははは……」

冗談なんだか
本心なんだか……

棚町薫

「それじゃあ
あたしもそろそろ
バイトに行かないと。」

桜井梨穂子

「私はもう少し……」

橘純一

「いや、梨穂子も
そろそろ帰った方が
いいんじゃないのか？」

桜井梨穂子

「で、でも……」

橘純一

「大丈夫だよ。
よくなってきたし、
今日のはのんびり寝れば
大丈夫さ。」

桜井梨穂子

「……………」

棚町薫

「どうせ女の子の前じゃ
できない事をしようと思
ってるんでしょう？」

橘純一

「べ、別に僕は
お宝本なんて！」

絢辻詞（白）

「お宝本？」

橘純一

「あ……」

桜井梨穂子

「あはは……」

し、しまった……

棚町薫

「まったく……」

絢辻詞（黒）

「変態。」

橘純一

「……………」

棚町薫

「桜井さんも
帰った方がいいわよ。」

桜井梨穂子

「う、うん……」

橘純一

「ま、待ってくれ！
これは誤解……」

しかし、3人とも
帰ってしまった。

はあ……

なんだか
また調子が悪く……●30分後

橘純一

「……………」

??????

「ふふっ、

可愛い寝顔……」

橘純一

「う、うーん……」

??????

「あ……」

橘純一

「も、森島先輩！？
何でここに……」

森島はるか

「2人の時は
は・る・かでしょ？」

橘純一

「そ、そうだったね
はるか……」

ど、どうして
はるかがここに？

橘純一

「はるか、
どうして僕の部屋に？」

森島はるか

「玄関の鍵
開いてたよ。」

橘純一

「ああ、そっか。」

そうか……

3人が帰った後

僕は寝ちゃったんだ……

森島はるか

「顔色悪いけど

大丈夫？」

橘純一

「うん、治ってきたから
大丈夫だよ。」

森島はるか

「橘君、

油断したら駄目よ。

治りかけが一番

大事なんだから。」

橘純一

「そうだね。」

それじゃあ僕は
ベッドでゆっくり
してるよ。」

森島はるか

「うん。」

橘純一

「それにしても
まさかはるかが
来てくれるとは
思ってたなあ。」

森島はるか

「本当は早く

橘君の家に
行きたかったんだけど
橘君のお家がどこだか
分からなくて……」

橘純一

「も、もしかして
ずっと探してたの？」

森島はるか

「う、うん……」

橘純一

「はるか……」

森島はるか

「あ、そうだ！

橘君、お腹減ってない？」

橘純一

「うん、すいてる。」

森島はるか

「私が何か作ろうか？」

橘純一

「い、いいの!？」

森島はるか

「だって、自分の彼氏がお腹ペコペコなのに
ご飯あげないなんて
可哀想じゃない。」

橘純一

「ははは、そっか。」こうして僕は
はるかの作った
手作り料理を食べた。

あんなに綺麗で可愛くて
彼氏想いなんて、
やっぱりはるかは
最高だなあ……

やっぱり僕は
はるかが一番だな。

第26話：体育祭編、のはずだった……（後書き）

この小説の橘さんは
本作よりも

リア充ですね（笑）

次回からは

ヒロイン1人1人の話を
個別に書いていきます。

第17話：絢辻詞編、メロンパンの脅威（前書き）

ピカチュン

「裡沙ちゃん……」

ポツチャマ

「上崎裡沙が
恋しくなったか？」

ピカチュン

「面白い小説が
書けないのなら、
せめて自分の好きな
ヒロインを幸せにして
あげたい……」

ポツチャマ

「それで
いいんじゃないのか？」

ピカチュン

「ポツチャマ……」

ポツチャマ

「好きなように書け。」

ピカチュン

「応援してくれるの？」

ポツチャマ

「いや。」

ピカチュン

「貴様、謀ったな！」

ポツチャマ

「ハハハハハハ！」

第17話：絢辻詞編、メロンパンの脅威

時は少し経って
今は7月の中旬。

そろそろ夏休みだ。

今日、私は橘君と
一緒に帰っていた。

橘純一

「それにしても
びっくりしたよ。
まさか絢辻さんに
告白されるなんて。」

絢辻詞（黒）

「あたしはただ、
自分の気持ちに
嘘をつきたく
なかっただけよ。」

橘純一

「はは、そっか。」

1回は諦めた橘君。

橘君は綾辻さんと
一緒に居る時の方が
楽しそうに笑っていた。

あたしなんかより
お似合いの人が
居るからと思って
諦めた。

でも、今は違う。

綾辻さんは橘君には
似合わない人……

ううん、橘君とは
口をきく権利すら
無い人だということを
あたしは知っている。

だから、あたしは
先手を打ったのだ。

絢辻詞（黒）

「いい？

浮気は絶対
許さないからね。」

橘純一

「わ、分かってるよ……

あたしの情報網によると
橘君は他の女の子とは
親しい関係には
なっていないらしい。

ピカチュン人形

(ニヤッ……)

綾辻さんも流石に

あたしが先に

彼女になるなんて

考えもしなかったみたい

あたしは学校の中で

できるだけ橘君と

一緒に居る。

あたしと橘君が

付き合っている事を

学校中の噂として

広めるために……

橘君も彼女が居れば

他の女の子とは

仲良くしようなんて

思わないに決まっている

だって、橘君は
誠実でいい人だから……

ちょっと頭の悪い所が
残念だけどね。橘純一

「それで僕と一緒に
行きたい場所って
どこなの？」

絢辻詞（黒）

「この先に美味しい
メロンパンが売ってるの
橘君にも食べて
貰いたいから
来たのよ。」

橘純一

「僕、ちょうど
メロンパンが食べたい
気分だったんだ。」

絢辻詞（黒）

「本当に？」

橘純一

「も、もちろんだよ！」

絢辻詞（黒）

「ふふ、まあ
それが本当かは
すぐに分かる事ね。」

橘純一

「え？」

絢辻詞（黒）

「それじゃあ
買ってくるわね。」

橘純一

「ぼ、僕が
買ってくるよ！」

絢辻詞（黒）

「いいわ、橘君は
ここで待ってて。」

橘純一

「で、でも……」

絢辻詞（白）

「私を買ってくる
って、言ってるの。」

橘君はここで待ってて
くれないかな？」

橘純一

「は、はい！」

絢辻詞（黒）

「素直でよろしい。」

橘純一

「はは……

最近は猫かぶりの

絢辻さんの方が

怖いような

気がするぞ……」

（……………）

絢辻詞（黒）

「お待たせ。」

橘純一

「あ、絢辻さん……」

絢辻詞（黒）

「どうしたの？」

橘純一

「そんなに沢山……」

絢辻詞（黒）

「だって、橘君
メロンパンが食べたい
気分なんでしょ？」

橘純一

「……………」

絢辻詞（黒）

「はい、あーん」

橘純一

「え、え!？」

絢辻詞（黒）

「あのね、恋人同士なら
このぐらい普通
するでしょ？」

橘純一

「そ、そうだね。」

絢辻詞（黒）

「はい、あーん。」

橘純一

（あーん）

こうして、あたしは
橘君に10個分の

メロンパンを
食べさせてあげた。

無理やり口に
押し込ませられている
橘君の顔……

面白かったなあ……く、口の中が乾燥して
苦しいぞ……

それにこれは
腹がやられたな……

で、でも絢辻さんが
こんな事をする
相手なんて
僕だけじゃないのか？

だとすると、これは
大成功じゃないか！

口の乾きと胸焼けなんて
この際、
気にならないぞ！

この調子で
絢辻さんと……

???

「ねえ、純一……」

誰だよ、せつかく人が
気分がいい時に……

棚町薫

「くっだらない事
してるのね……」

橘純一

「……………」

棚町薫

「自分がああいう事
している姿ってさ、
恥ずかしいと
思わないの？」

橘純一

{うっ……}

棚町薫

「ホント、写真に撮って
あんたに見せたかった」

橘純一

「そ、それは
誤解なんだよ！」

棚町薫

「何が誤解なのよ？」

橘純一

「……………」

な、何かいい
言い訳は……

橘純一

「ええっと、
その……あれは……
そう！」

罰ゲームなんだよ！
ちよつと絢辻さんに
負けちゃったから
罰ゲームとして
メロンパンを口の中に
無理やり
押し込まれたんだ！
だからあれには
深い意味なんて

ないんだよ!」

棚町薫

「……………」

橘純一

「誤解させて……
本当にごめん……」

棚町薫

「……………」

橘純一

「……………」

棚町薫

「もう、
誤解させるような事
しないって約束する?」

橘純一

「……………」

棚町薫

「……………」

橘純一

「……………しない。」

棚町薫

「そう……」

それならいいわ……」

橘純一

「え……」 棚町薫

「今回だけは
信じてあげる。」

橘純一

「えっ!？」

棚町薫

「ただし、
2度目はないからね。」

橘純一

「う、うん……
薫、本当にごめん……」

棚町薫

「もういいってば。
それじゃあ、
あたしバイトに行くね」

橘純一

「う、うん……」

こうして、薫に
許して貰えた。

僕は……

あ、あれは森島先輩！

橘純一

「森島先輩！」

森島はるか

「あ、橘君！」

棚町薫

「……………」

棚町薫との関係が
変化しました。
ナカヨシ↓テキタイ

第17話：絢辻詞編、メロンパンの脅威（後書き）

第18話は別な場所に
保存してあります。

<http://nk.syosetu.com/novelvie>
[w/content/s/code/n0182r/](http://nk.syosetu.com/novelvie)

<http://nk.syosetu.com/n0182r/5/>

ヤンデレ耐性のない人は
見ない方が
いいと思います。

第18話..綾辻つかさ止マナイ雨ニ病ミナガラ

●学校

もうすぐ夏休み……

今は雨が降っていた……

雨の日は嫌い。

なぜなら、

雨の日になると……

桜井梨穂子

「純一、ちよつと
いい?」

橘純一

「ん、どうした？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「……………」

いつもは橘君の浮気も
なんとか許せるけど、
雨の日になると
私の気分が悪くなる。

橘君はいつか私だけを
見てくれる日が来る
と、いつもは信じて
疑わないのだけど、
雨の日になると
橘君が他の女の子と
仲良くしていると
私の橘君が
取られてしまう
のではないかと
心配になってしまう。

疑ってしまう。

不安になってしまう。

心が引き裂かれそうに
なってしまう。

死にたくなる……

どうして……

どうして雨の日は橘君を
信じられなくなるの……

それに、雨の日は
いつもより橘君を
求めている。

他の女の子と
話している所に
無理やり
入りたいと思ってしまう

でも……それは……

それをしたら……

橘君が困ってしまう……

他の女の子が

困ったり

傷ついたりするのは

何とも思わないけど、

橘君が困るのは

絶対に駄目……

だけど……だけど……

頭で分かっている……

分かっていても……

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君、ちょっといいかな？」

橘純一

「あ、綾辻さん……ど、どうしたの？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「図書委員の仕事の事で

話があるんだけど、ちよつといいかな？」

橘純一

「うん、いいよ。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「桜井さん、
ごめんね。」

桜井梨穂子

「ううん、いいよ。」

私は橘君を
桜井梨穂子から
引き離した。●空いている教室

橘純一

「綾辻さん、
図書委員の仕事の
事って……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君！」

(ぎゅ……)

橘純一

「あ……」

私は橘君に抱きついた。

綾辻つかさ(闇辻さん)

「私、もう限界なの！

橘君が他の女の子と
仲良くしている所を
見るのは！

橘君はモテるから

他の女の子が

近づいて来るのは

仕方ないけど……

仕方ないと思って

我慢してきたけど……

もう限界なの！

私は橘君が欲しい！

私だけのものにな
って欲しい！

他の女の子なんかと
関わって欲しくないの！
私だけを見ていて
欲しいの！」

橘純一

「綾辻……さん……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「どうして……
どうして私は……
もっと早く……」

綾辻さん、こんなに
苦しんでる……

僕がふらふらと
していたせいで……

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君の事を
好きになった時に
告白していれば……」

橘純一

「僕は……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「……………」

橘純一

「僕は……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「いきなり

こんなこと言われても
困るよね……」

橘純一

「そんな事は……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君が困る顔は
見たくなかったのに
こんなこと言って……
私は……最低よ……」

橘純一

「……………ごめん
最低なのは
僕の方だよ……
綾辻さんの
気持ちも考えないで
ふらふらして……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「橘君は悪くない。
あんなにたくさんの
可愛い女の子に
囲まれたら
無理ないよ……」

橘純一

「……………」綾辻つかさ（闇辻さん）

「私は橘君が好き。」

どんなにフラフラしても

橘君が大好き……」

橘純一

「綾辻さん……」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「でも、これ以上

フラフラされたら

私……壊れちゃう……」

橘純一

「……………」

ぼ、僕はどうしたら……

● 選択肢

- ・ 他の女の子が大事だ。
- ・ 綾辻さんが好きだ……
- ・ みんなと仲良く……
- ・ もう僕には……

ピカチュン

「ポツチャマさん。
あなただったら
どれを選びますか？
いちよう綾辻さんが
ヤンデレモードに
入っている事も
配慮に入れて
考えて下さい。」

ポツチャマ

「絶対3番！（笑）」

ピカチュン

「……………」

ポツチャマ

「ピカチュン、
お前は？」

ピカチュン

「僕は選びません。
ポツチャマの判断に
おまかせします。」

ポツチャマ

「そうか。」

ピカチュン

「では、次回に
続きを書きましょう。」

ポツチャマ

「さて、どうなる
事やら……」

第18話：綾辻つかさ止マナイ雨ニ病ミナガラ（後書き）

この小説内では
1つの選択肢しか
選んでいませんが、
他の小説に他選択肢を
選んだ場合が
書いてあります。

<http://nk.syosetu.com/novelvie/contents/ncode/n0182r/>

かなり異質な話なので
見る方はそれなりの
覚悟をお願いします。

●選択肢

・他の女の子が大事だ。

・綾辻さんが好きだ……

・みんなと仲良く……

○もう僕には……

橘純一

「僕は馬鹿だ！

何人もの女の子を

その気にさせて！」

綾辻つかさ

「橘……君？」

橘純一

「もう僕には……

誰とも一緒になる

権利なんてない！」

そう言うと僕は
教室を飛び出した。

綾辻つかさ

「橘君！」

ピカチュン人形

「ヒロインさん達……
第2章で幸せに
なって下さい……」

綾辻つかさ

「え？」

そして新作になる。

ピカチュン人形

「さようなら。」

綾辻さんの
携帯電話についていた
ピカチュン人形は
どこかに消えた。

綾辻つかさ

「あ、あれ、私……」

森島はるか

「何か忘れたような……」

桜井梨穂子

「あれ、私……」

絢辻詞（白）

「何なの、
この違和感……」

棚町薫

「どうして

あたしあんなに

腹が立ってたんだろ？」

ヒロイン達のデータが
書き換えられました。

ピカチュン人形

「ここから新たな

物語が始まるであろう。

トゥルーエンドへ続く

物語が……」

ポツチャマ

「無理やりだな……」

ピカチュン

「まあ、作者は
優柔不断です
からね（「▽」）」

ポツチャマ

「相変わらず
適当だな……」

ピカチュン

「誉めても何も
出ないよ（≡▽≡）」

ポツチャマ

「……………」

第29話：反省（前書き）

ピカチュン

「27話と28話を
間違って17と18に
してしまった……」

ポツチャマ

「書き直して来いよ……」

ピカチュン

「いや、変にいじると
データが
消えてしまうので
このままにしておきます

ポツチャマ

「おいおい……」

第29話：反省

昨日を境目に

誰も僕に

話しかけて

来なくなってきた。

まるで忘れたように……

これが優柔不断な僕の
末路だな……

梅原正吉

「大将……」

橘純一

「僕は……焦り
過ぎたのか？」

梅原正吉

「そうみたいだな……」

橘純一

「……………」

梅原正吉

「これをふまえて

また1から

頑張ろうぜ。」

橘純一

「……………ああ、

そうだな。」

あの悪夢は
見なくなった。

それから僕は

自分のやった事が
最低だと言う事を
理解できた。

そうだな、

今後は焦らずに

1から頑張るか……

今度は誰も傷つけない。

今度は上手く

やってみせる……

梅原正吉

「行こうぜ、大将。」

橘純一

「ああ！」

上崎裡沙

橘君……

橘純一は作者の洗脳から
解かれました。

第29話：反省（後書き）

ピカチュン

「やっぱり僕の小説には
裡沙ちゃんが必要です！」

ポッチャマ

「次で30話だから
ちょうど切りがいいな」

ピカチュン

「就職なんかより
裡沙ちゃんを
優先させますよ！」

ポッチャマ

「頑張れ、
未来のニート。」

ピカチュン

「了解です（、▽、）」

第30話：上崎裡沙編・ピカチュン人形

●上崎家

上崎裡沙

「橘君……」

私は見た。

橘君が他の世界で
綾辻さんに酷い目に
遭わせていたのを
私は知っている。

何故なら……

ピカチュン人形

「どうしたの
裡沙ちゃん？」

紳士の名前を
つぶやいて……」

このピカチュン人形君が
全部見せてくれたから。

別の世界の事も
他の女の子が
橘君に好意を
持たなくなった事も……

上崎裡沙

「あたし橘君に
どうしたらいいのか……

ピカチュン人形

「今の橘さんを
救えるのは
裡沙ちゃんだけだよ。」

上崎裡沙

「あたしは……」

ピカチュン人形

「大丈夫。

僕は今まで綾辻さんの
味方をしてきたけど、
今は裡沙ちゃんの
仲間だから。」

上崎裡沙

「ピカチュン君は
どうするつもりなの？」

ピカチュン人形

「橘さんに真実を
話すつもりです。」

上崎裡沙

「……………」

ピカチュン人形

「もちろん、

裡沙ちゃんが嫌なら

僕はやめるよ。

だけど、橘さんも

裡沙ちゃんも

前に進むためには

真実を受け入れないと

駄目だと僕は思う。」

上崎裡沙

「前に進むためには……

ピカチュン人形

「裡沙ちゃんが決めて。

僕の決める事じゃない

から……」

上崎裡沙

「……………」

あたしも分かっていた。

前に進むためには……

第31話：真実の世界・作者パワー全開！

●夢の中

橘純一

（また君か……）

バンダナ・ピカチュン

（今日で会うのは
最後だよ。

今日は橘さんに
真実を教えに来たよ。
クリスマスの……）

橘純一

（その事なら
知ってるよ……）

ピカチュン

（このクリスマスは

時原美佳と裡沙ちゃんと
綾辻つかさが
関わっていたんだ。）

橘純一

（綾辻さんも！？）

ピカチュン

（今の綾辻さんは
橘さんの事を
好きじゃないけど、
ちょっと前までの
綾辻さんは
橘さんに依存していて
とんでもない事を
やらかしたんだ。）

橘純一

（それとクリスマスと
どう関係が……）

ピカチュン

（そもそも裡沙ちゃんが
蒔原美佳に嘘の
待ち合わせ場所を
教えた理由が分かる？）

橘純一

（僕が知る訳ない
だろ……）

ピカチュン

（橘さんを
守るためだよ。
自分の大好きな
橘さんを守るため……）

橘純一

（上崎さんが僕を！？
好きなのに………
話が見えないよ………）

ピカチュン

（それなら、

お見せしましょう。

クリスマスに

何が起こっていたかを……

蒔原美佳と綾辻つかさと

裡沙ちゃんの

本意を……)

橘純一

(……………) ● 中学校

女子生徒

「ねえ、美佳

クリスマスは

女の子達と一緒に
過ごさない？」

蒔原美佳

「あ、いいね。」

綾辻つかさ

「橘君との約束は

どうするの？」

蒔原美佳

「大丈夫だよ。

橘君、お人好しだから
謝っておけば

大丈夫、大丈夫。」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「……………」

やっぱり、この女

橘君の事を

何とも思っ

ないのね……

フザケンジャナイワヨ！

橘君ガドンナニ

美佳ノコトガ好きカ

分カッテナイノ！？

ドンナニ腐ッタ人デモ
ヤッテいい事ト
いけない事が
アルノヨ！

許セナイ……

橘君ガコノ女ヲ
好キデアルコトガ
許セナイ……

絶対ニ橘君ト
コイツヲ別レサセテ
ヤル……

綾辻つかさ（闇辻さん）

「ネエ美佳、
普通ニ橘君ニ
予定ガ変ワッタコトヲ
言ッテモ面白ク
ナイカラサ、

クリスマスの余興トシテ
橘君ヲみんなノ前デ
フツテクレナイ？」

蒔原美佳

「え、どう言う事？」

綾辻つかさ（闇辻さん）

「クリスマスの日ニ
フラレルナンテ
スゴイネタニナルト
思ワナイ？
キット楽シイト
思ウヨ……」

蒔原美佳

「確かにいいかも！」

女子生徒

「そんな事して
大丈夫なのかな……」

蒔原美佳

「大丈夫だって、
それじゃあ早速みんなに
言わないとね。」

フフツ……

コレデ私ニモ
チャンスガ来ル……

橘君、待ッテテネ。

橘君ガ美佳ト
別レタラ………

フフフフフ……女子生徒

「ねえ、上崎さん。」

クリスマスにさ
私達と一緒に
橘君がふられる所
見に行かない？」

上崎裡沙

「え！？
橘君がふられるって
どういう事なの！？」

女子生徒

「クリスマスの
ちょっとしたイベントで
デートの待ち合わせ場所
に來た橘君を
美佳がふるって
感じかな？
で、上崎さんは
どうするの？」

上崎裡沙

「あたしは……
遠慮しようかな……」

女子生徒

「そっか。」

上崎裡沙

「そのイベントって
蒔原さんが……」

女子生徒

「ううん、つかさだよ」

上崎裡沙

「綾辻さんが……」

女子生徒

「さて、私は
他の人を誘わなくちゃ
だから。」

上崎裡沙

「うん……」

そんな……橘君が
美佳さんに……

ううん、そんなの
絶対に駄目！

あたしがなんとかして
橘君を守らなくちゃ……

橘純一

「……………」

ピカチュン

「この後の事は
分かるよね？」

橘純一

「どうして

綾辻さんが……」

ピカチュン

「綾辻さんは

橘さんと蒔原美佳が
別れる事を願って
こんな事をしたんだ。」

橘純一

「僕を独り占め
したくて……」

ピカチュン

「裡沙ちゃんが
間接的にしか

橘さんを
救えなかった理由は
裡沙ちゃんに
勇気がなかったからだよ

橘純一

「……………」

ピカチュン

「でも、裡沙ちゃんはそのことを今でも後悔しているんだ。自分に勇気があれば大好きな人が傷つかないで済んだのにな……」

橘純一

「……………」

ピカチュン

「みんな、やり方を間違ってしまったんだよそれで大事な人が傷ついてしまうなんて考えずに……」橘純一

「でも、もう綾辻さんは
僕の事を……」

ピカチュン

「好きではない。」

橘純一

「……………選択を

間違わなければ

僕は……………綾辻さんを
救えたのか？」

ピカチュン

「大丈夫だよ。

綾辻さんは

また新しい人を

見つけるよ。

自分を正しい方向に

導いてくれる人を……」

橘純一

「……………」

ピカチュン

「でも、裡沙ちゃんを
正しい方向に
導いてあげられるのは
橘さん、あなただけです
裡沙ちゃんは
このままだと
他の女の子を
傷つけてしまうかも
しれません。」

橘純一

「どういう事？」

ピカチュン

「裡沙ちゃんは
橘さんが好きなあまりに
他の女の子を
敵とみなして
傷つけてしまうのです。
別の世界では
そうでした……」

橘純一

「別の世界？」

ピカチュン

「アマガ…………ゴホン！
とにかく裡沙ちゃんを
救ってあげて下さい。
お願いします…………」

橘純一

「……………」

ピカチュン

「それでは…………」

緑色のバンダナをつけた
ピカチュウは
消えようとしていた。

橘純一

「最後に1つ聞くけど
君は何者なの？」

ピカチュン

「この世界の
神とでも
言っておくよ。」

橘純一

「神……」 ● 橘家

橘純一

「夢……か……ん？」

僕は枕の横に
手紙が置いてあるのが
見えた。

トゥルーエンドへの
ルートへようこそ。

裡沙ちゃんをよろしく！

b yピカチュン

橘純一

「……………」

字が下手すぎて
何って書いてあるか
分からない……

第32話：1章最終話・やっぱり裡沙ちゃんが1番でしょ（△）（前書き）

ハッスル・ポツチャマ

「やっぱり

こうなったか……」

バンダナ・ピカチュン

「批判は一切

受け付けないからね！

ポツチャマ！」

ポツチャマ

「批判する価値もない」

ピカチュン

「……………」

第32話：1章最終話・やっぱり裡沙ちゃんが1番でしょ（´▽´）

●空いている教室

上崎裡沙

「来てくれましたか。」

橘純一

「うん、その
ピカチュン人形に
案内されてね。」

僕は裡沙ちゃんの
携帯電話についている
ピカチュン人形を
指差した。

上崎裡沙

「橘君、ごめんなさい！」

あたし、あなたに……」

橘純一

「もう、いいんだ……」

上崎裡沙

「え？」

橘純一

「やり方は
どうかと思うけど
上崎さんは
僕を助けてくれた。
それだけで僕には
充分だよ……」

上崎裡沙

「橘君……」

橘純一

「上崎さん、

上崎さんは僕の事が
好きなの？」

上崎裡沙

「は、はい！」

橘純一

「僕、上崎さんに
好きになるような事した
覚えはないんだけど……」

上崎裡沙

「……………」

橘純一

「ごめん……」

上崎裡沙

「仕方ないです。

あたし、
目立たないから……」

橘純一

「え？」

上崎裡沙

「小学生の時
給食を残した人が
掃除の時間まで
残されていた事
覚えてますか？」

橘純一

「ああ、うん。
なんとなくね。」

上崎裡沙

「あたし、どうしても
牛乳が飲めなくて……
それで掃除の時間まで
困ってた時、

橘君があたしの牛乳を
飲んでくれた……」

橘純一

「あ！」

僕は思い出した。

小学生の時は
余った牛乳を
片っ端から飲んで
腹壊したんだよな……

上崎裡沙

「思い出しましたか？」 橘純一

「うん、でも
それだけで僕の事を？」

上崎裡沙

「あの時の橘君、
あたしの王子さまに
見えたんです。」

橘純一

「僕が……王子さま……」

こんな僕が王子さまに
見えただなんて……

上崎裡沙

「今でもあたしの
王子さまです……」

橘純一

「上崎さん……」

上崎裡沙

「橘君、あたしを
あなたの………ううん
あなただけの女の子に
して貰えませんか？」

橘純一

「こんな僕でいいの？」

上崎裡沙

「はい！」

あたし、橘君じゃないと
駄目なんです！」

橘純一

「僕でいいのなら……」

上崎裡沙

「え？」

橘純一

「上崎さんを
僕だけの女の子に
するよ。」

上崎裡沙

「本当ですか!？」

橘純一

「うん、今日から

上崎さんは

僕の彼女だよ。」

上崎裡沙

「橘……………君……………!」

突然上崎さんが
泣き始めた。

橘純一

「ど、どうしたの!？」

上崎裡沙

「嬉しくて……
あなたの彼女に
なれた事が
嬉しくて……」

橘純一

「そ、そっか……」

こうして上崎さんと
付き合う事にした。

僕は今まで
たくさん女の子達を
傷つけてしまったけど
もう、それも終わりだ。

こんな僕を見てくれる

上崎さんを
愛して生きていく。

上崎さんだけを……

★BEST END★

第32話：1章最終話・やっぱり裡沙ちゃんが1番でしょ（V）（後書き）

ポツチャマ

「で、紳士と上崎裡沙の
純愛話はどこで
書くんだ？」

ピカチュン

「第2章の中で
少しずつ書く予定です。
第2章は主人公を
5人ぐらいにして
それぞれの話を
個別に書いていく
予定です。」

ポツチャマ

「ちなみに、
黒銀龍大は
ゲームの中の俺を
モデルにしたんだよね？」

ピカチュン

「はい、そうです。
同時攻略の神として
降臨して下さい。」

ポッチャマ

「よし、涙イベント
浮気イベント
スキBADを
読者のみんなに
プレゼントするぞ！」

ピカチュン

「橘さんと裡沙ちゃんの
純愛話もお楽しみに。」

ポッチャマ

「で、第2章は
どんな話にするんだ？」

ピカチュン

「今度更新する時に

書きます。」

ポツチャマ

「いつ更新するんだ？」

ピカチュン

「さあ（＼＼、）」

ポツチャマ

「……………」

今後の予定(前書き)

ポツチャマ

「この小説に
顔を出すのも
これで最後か……」

ピカチュン

「次回作はポツチャマも
いいネタを探してね。」

ポツチャマ

「了解………って
それはいつも
やってるだろ！」

ピカチュン

「と、こんな感じの
コメディーにしたいと
思います。」

ポッ
チャ
マ

「なん
って
回避
だ……
」

今後の予定

今後は別小説

F-105 に

続きを書いていきます。

さまざまな

主人公の視点で

書いていく予定です。

●橘純一

裡沙ちゃんとの

純愛ほのぼの生活を

書く予定。

同じような話が

続いてしまう

可能性があるのでは

飽きてしまう

可能性大です。

●真田光一

ヒロインとの三角関係を

書く予定。

アニメ顔負けの
酷い性格になって
いるので、

二股の話が嫌いな人は
見ない方がいいかも
しません。

●白銀蒼鬼

ヤンデレの女の子達に
邪魔されながら
アマガミヒロイン達や
キミキスヒロイン達と
付き合う話を書く予定。

●黒銀龍大

浮気イベントや
涙イベント、
スキBADなどの
ヒロインが傷つく話を
中心に書いていく予定。

故意にヒロインを
傷つける性格なので
耐性がない人は

見ない方がいいかもしれない。

●トロロコンブ

イケメン高校生の
リア充生活を
書いていく予定。

ナルシストなので
自意識過剰なキャラが
嫌いな人は見ない方が
いいかもしれません。

簡単に書くと
こんな感じです。

本当の主人公は
白銀蒼鬼ですが、
作者的には
裡沙ちゃんの話と
(橘さん主人公)
黒銀龍大の話を
(BAD関係)
優先させて
書く予定です。

この小説と比べて
ドロドロな恋愛話と
ヤンデレヒロインの話が
充実する予定なので
そういう話が好きな人は
是非とも見て下さい。

逆に、アニメの
キミキスよりも
酷い話になると
思うので、
純愛系の話が
読みたい方達は
裡沙ちゃん以外の話は
見ない方が
いいと思います。

それでは、
また次の小説で
会いましょう。

今後の予定（後書き）

次回作、F-105

<http://nk.syosetu.com/n5422u/>

皆さん、

また会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3239s/>

F - 105 前置き（携帯用小説）

2011年8月1日23時24分発行